

官能ホラー人肉小説「Misako 前編」



大黒達也

# 『M i s a k o』

作者 大黒達也

## 一・作品紹介

親友同士で不良中年の大黒達也と近藤圭吾は、ある日、ふとしたきっかけで神秘的な美女 加賀美京子と知り合い、彼女をつけ狙う吸血鬼の群れと死闘を繰り返す。満身創痍になりながらも、二人はなんとか彼女を守り抜く。

ここまでは、前作「K y o k o」のあらすじです。

本作品は、加賀美京子と別れ、さらに家庭から見放された二人がおかしな共同生活を始めるというストーリーです。全編にカニバリズム描写とエロティックなヴァンパイアが登場しますのでご期待下さい。

二・登場人物

大黒 達也（オオグロ タツヤ）

大手コンピュータメーカーを首になり、ひよんなきっかけから、美佐子率いるヴァンパイアの美女軍団を使って、キヤバクラを始める。空手や柔道など武道の達人

近藤 圭吾（コンドウ ケイゴ）

大黒の親友であり、元産婦人科の医師。大黒とともにキヤバクラを経営する。剣道の達人

工藤 美佐子（クドウ ミサコ）

たぐい希な美貌と抜群のプロポーションを持つ女吸血鬼。大黒の妻となる。

大杉 美由紀（オオスギ ミユキ）

暴走族のメンバーだったが、大黒、近藤によって改心

する。近藤の妻となる。

大石 真由美（オオイシ マユミ）

美佐子の妹的存在。同様に美しく、小悪魔的な娘

サムソン

身長三メートルを越す食人鬼。美女達を食って、食って、食いまくる。

マリア

美貌と残虐な心を持った女戦士。サムソンとともに大黒達の前に立ちはだかる。バイセクシャルで、サデイト。美しく若い女が何よりも好物

三・目次

第一章 サムソン

第二章 女神達

第三章 計画

第四章 披露宴

第五章 皆殺し

第六章 天国と地獄

第七章 拉致

第八章 陵辱の嵐

第九章 反撃

第十章 生贄

第十一章 晚餐

## 『本編』

### 第一章 サムソン

二千年七月十五日深夜〇時、ニューヨーク、マンハッタン島イーストビレッジ十一丁目界隈の小路に、ハイヒールの靴音が響いていた。年の頃は、二十歳くらいの女が、電灯が切れかかった暗い小路を、息を弾ませながら駆けていた。

女の名は、エレナ。証券会社に勤務するOLであり、スリーサイズ九十、六十、九十のナイスボディに、モデルでも通用するような美しい顔立ちをしていた。

流れるような金髪をなびかせ、額に汗を浮かべ、必死に駆けていた。

エレナは会社帰りに、いつものクラブで友人達と酒を

飲み、会話を楽しんだ後、タクシーに乗り家路へと向かった。運転手はごく普通の中年男に見えた。エレナはその晩、かなり酔っていた。タクシーに乗り、行き先を告げた後、すぐに寝息を立て始めた。運転手はエレナの意に反し、ニューヨークの危険地帯である、深夜のイーストビレッジに車を乗り入れた。エレナがこれほどの美女でなければ、運転手も魔が差さなかったであろう。

エレナは、下半身に異様な感触を覚え、目を覚ました。タクシーの後部座席に仰向けにされ、履いていたスラックスは脱がされ、パンティが膝まで下ろされていた。運転手が股間に顔を埋め、ピチャピチャと厭らしい音をたてながら、膣を舐めていた。ごつごつとした指先が、アヌスに食い込んでいた。エレナは絶叫し、咄嗟に運転手

のネクタイを両手で掴み、思いつきり引つ張った。運転手は、ゼイゼイと苦しそうな息をして、路上に転がった。エレナは何とか立ち上がり、ハイヒールを履いたまま、走り出した。

恐怖のために、激しい尿意に悩まされていた。男に捉まったら、今度こそ強姦され縊殺されるだろう。走りながら、何度も背後を振り返った。男は追っては来なかった。周囲の状況を観察する余裕ができた。すぐに愕然となった。ここには、日中一度来たことがあった。深夜のイーストビレッジは、若い女がひとり歩きするところではない。深夜でも人が集まりそうなバーやクラブを探したが、見当たらなかった。どのビルの明かりも消えており、ひっそりと静まり返っていた。エレナは走りながら



ひたすら、神に祈った。これまでこれほど真剣にキリストの名を念じたことはなかった。エレナの必死の願いは届かなかった。小路の先に、男達の一団がたむろしているのが見えた。既に引き返すことはできなかった。男達のひとりが、エレナに気付き仲間知らせた。

すぐに、黒い皮ジャンを着たヒスパニック系の容姿を持つ五、六人の男達に囲まれた。年の頃は皆、十代後半といった若さであった。

「なんだい。この女は？上等なスーツの下はパンティい  
つちようとは。あたい達に可愛がってもらいたいのか

い。」

男達の中に交じって、十八歳くらいの女が上ずった声をあげた。ラテン系のエキゾチックな顔立ちをした女は、

残忍な笑みを浮かべ、エレナの肢体を舐めるように眺めていた。

「今晚の獲物は、上玉だね。さあ、お嬢ちゃん。脱ぎな！何してるんだい。さっさとオマ＊コ見せるんだよ！」

エレナは、大きな胸を抑え、呆然とした表情で佇んでいた。膝頭ががくがくと震えていた。また、激しい尿意が襲ってきた。

「何やってるんだい。言うことがきけないのかい？」

「…：助けてください。お金なら何とかありますから」

「へー。この可愛い娘ちゃんは、金を恵んでくれるんだってさ。聞いたらう。あんた達」

男達の間忍び笑いが伝わっていった。その時、女が前に出て、自分より背が高いエレナの身体を抱きしめ、

顔を引き寄せ唇に吸い付いた。

「むぐ……。止めて！」

エレナが女を突き飛ばした。

「このクソアマ舐めた真似しやがって！」

女の蹴りが、エレナの腹部に決まり、アスファルトの路上に転がった。乾いた路面には、昼間の日射の温もりがまだ残っていた。

「お前達。手足を抑えるんだよ」

男達は、路上に仰向けで倒れたエレナの両手両足を押え込んだ。

「さあ。可愛い娘ちゃんのオマ＊コを、挿ませてもらおうよ」

女は、嬉嬉とした表情を浮かべ、パンティに手をかけ

た。ストッキングは、タクシーの運転手に脱がされていた。豊かな尻の方から、パンティを抜き取り、男達のひとりに手渡した。男はうっとりとした表情を浮かべ、パンティの匂いを嗅ぎ、持っていた皮製のバックに入れた。

「レジーナ。高く売れそうだけ」

「若い女の匂い付きだからね」

レジーナと呼ばれた女は、満面の笑みを浮かべながら剥き出しにされたエレナの膣に食らい付いた。舌先で壁を、舐め上げクリトリスを、音を立てて啜った。

「止めて！許して！」

エレナは、同性による残酷な虜りに声をあげて泣いた。レジーナの生暖かい舌が膣の中で蠢いていた。衣服の上から、男達に豊かな乳房を揉まれていた。激しい屈辱感

を覚えながらも、身体自体は熱い疼きを感じ始めていた。それがいつそう屈辱感を煽り立てた。周りで見えていた男達は、血走った眼差しで、エレナが陵辱される様を見詰めていた。

暫くの間、レジーナはエレナの臆やアヌスを舐った後、愛液で濡れた顔を上げた。

「今度はおっぱいを、見せてもらおうじゃないか」  
スーツのボタンを、慎重な手つきで外され、脱がされた。レジーナの柔らかな指が、ブラジャーのホックを外し剥ぎ取った。レジーナはそれらを一まとめにして、先ほどの男に手渡した。

エレナは、アスファルトの上に全裸で横たわっていた。男達が荒い息を立てながら、エレナの盛り上がった乳房

を掴み、太腿を触った。

「止めて！助けて！」

「まだわからないのかい？お前はあたい達の獲物なんだよ。もうお前のものなんか何も無いのさ。このきれいな身体もすべてあたい達のものさ。楽しませてもらった後は、売りさばかれるんだよ。若くきれいな女は高く売れるんだ。なんでも金持ちの年寄り達が若返りのために食らうんだよ」

「レジーナ、レズの女達に、売るつてのは、どうだい？」  
手を抑えていたがっちりとした体格の男が、上ずった声をあげた。

「そうだね。お嬢ちゃんどっちがいい？あいつら、テクニシャンだよ。昼も夜もいきっぱなしになるね」

「人でなし！」

「ありがとうよ。最高の誉め言葉さ。デイブ、こいつを抱き上げておくれ。ケツが見たいんだよ」

先ほどのがっちりとした体格の男が、身長百七十センチはあるエレナの両脇に手を入れ、前から軽々と抱き上げた。男達の視線が、白く盛り上がったエレナの尻に絡み付いた。



「へえ。いいケツしてやがる。女のあたりでも惚れ惚れするね」

レジーナが顔を近付け、鼻先をアヌスに押し付け匂いを嗅いだ。若い女の素晴らしい匂いがした。臍に指先を



忍び込ませ、サーモンピンクのきれいなアヌスに舌を這わせた。

「ああ……。止めて。お願い……」

エレナの尻が、舌の動きに合わせてるように微かに動いた。艶めかしい動きだった。男達が股間を剥き出しにして、男根を抜き始めた。

「こいつ感じているぜ！」

男達のひとりりが、歓声をあげた。レジーナが顔をあげ、にんまりとした笑みを浮かべて、エレナのむっちりとした腰を抑え、人差し指と中指をあわせアヌスに当てた。それを一気に突き入れた。

「嫌、痛い！」

エレナの背筋が大きく仰け反った。指先は根元まで食

い込み、直腸の中で蠢いていた。アナルセックスの経験の無い、エレナにとって拷問にも等しい指の動きであった。引き裂かれる苦痛とともに排泄感が湧き上がった。

それから、本格的な陵辱が始まった。アスファルトの上に、四つん這いにされたエレナを、男達が背後から次々と刺し貫いた。レジーナがエレナの前に座り、エレナの顔を、剥き出しにした股間に擦り付けていた。レジーナは、気持ちがいいのか時より目を閉じ、舌で唇を舐めまわした。

「気を入れて舐めるんだよ」

すぐに売るのは惜しい気もした。一週間くらい隠れ家で飼おうかとも考えていた。レジーナは男でも女でも抱くことができるバイセクシャルであった。美しい女には

触手が動いた。これまでに何人もの若く美しい女を陵辱してきた。時に興奮のあまり絞め殺してしまうこともあった。瑞々しい裸身が、悶え苦しむ様は見えていてそれだけで逝きそうになった。目の前では男達のひとりが、気持ちよさそうにエレナの白く盛り上がった尻を抱いていた。黒々とした男根がクチュクチュといういやらしい音を立てて臙に出し入れされていた。

突然、近くでドーンという重い地響きが起こった。エレナを除く、皆の視線が音の方に向けられた。小路の暗い片隅に何か巨大なものが、動いていた。さっきまで何も無かったところだ。それが立ち上がった。それは長身の男達が見上げるほどの大きさであった。身長三メートル以上は優にある。それがゆっくりと近付いてきた。暗

がりの中から出てきたのは、白人の巨人であった。ラテン系の浅黒く引き締まった顔、高い鼻の両側にはブラウンの瞳が妖しい光を放ち、大きめの口は閉じていた。白いTシャツの上に黒い皮ジャンパーを羽織、方々が擦り切れたジーンズを履いていた。巨人の男の視線が、全裸でアスファルトに横たわるエレナに注がれていた。口元に光るものが見えた。男は涎を垂らしていた。

「その女を、渡すんだ」

低い地鳴りのような声が発せられた。それが男達の呪縛を解き放った。

「なんだ。この化け物は！お前達、殺っておしまい！」

男達は、それぞれの得物を懐から取り出した。コルトガンメントやスミス&ウェッソンM十九等の拳銃を、

巨人に突きつけた。

「ハッ、ハッ、ハッ」

巨人が笑い声をあげながら、ゆっくりとした動作で向かってきた。

「バーン」

乾いた一発の銃声が、イーストビレッジの闇を引き裂いた。それが引き金となって男達がいっせいに発砲した。

巨人の胸や腹に着弾し、血飛沫があがった。空葉莢が飛び、辺りに硝煙が立ち込めた。驚くべきことに、数十発の銃弾を受けながら大男は平気な顔で、佇んでいた。男達の拳銃はすぐに空になり、空撃ちの音が虚しく響いた。

「ポトン、ポトン」という微かな音が巨人の足元から聞こえてきた。それは巨人に命中した銃弾がアスファルト

の路面に落ちて、音を立てているのであった。

「化け物だ！」

重苦しく、氷のように冷たい恐怖が、男達に伝播した。

巨人からもっとも離れていたダイブが皆を捨て、逃げ出そうとした。怒涛のような速さで巨人が先周りし、片手で百キロ以上はあるダイブの頭を、上から鷲掴みにし、空中に持ち上げた。

「助けてくれ！止める。離しやがれ……うっ。ギャー……」

「バキバキ」という音が響き、ダイブの頭が、巨人の手の中で砕けた。脳漿と鮮血にまみれた死体を檻褸屑のように放り投げた。巨人はニヤリと不気味な笑いを浮かべた。顔つきが変わり始めた。耳元まで裂けた口元から巨

大な犬歯がはみ出し、目が真紅の光を放ちルビーのよう  
に輝き始めた。それは悪夢に出てくる悪鬼の顔そのもの  
であつた。巨大な筋肉が音を立て、瘤のようになって動  
いていた。巨人は、一塊になり脅えた目付きで巨人を見  
詰める男達に襲いかかった。女のような悲鳴をあげて逃  
げ回る男達を、捕まえては縊り殺した。男達のあげる断  
末魔が、暗い小路に響き渡つた。

男達のひとりは、身体を逆海老反りに曲げられ、背骨  
を折られた。ある男は頭をもぎ取られた。鋭い爪で腹部  
を裂かれ、内臓を撒き散らす男もいた。

一瞬で五人の男達が、引き裂かれた遺体となつてアス  
ファルトに転がった。

残つたのは、腰を抜かし路上で必死に立ち上がろうと

しているレジーナと、全裸で腹ばいになり、巨人を憑か  
れたように見上げるエレナだけであった。

「止めて！殺さないで……」巨人が片手で、髪を振り乱  
し泣き叫ぶレジーナを掴みあげた。レジーナの顔をまじ  
まじと見詰めていた。獣のような異臭に満ちた息がレジ  
ーナの顔に、吹き付けられた。

「お前。けっこう可愛い顔しているな」

巨人が楽しそうに微笑んだ。

「身体もむっちりとしていて、食らい甲斐がある……」

大きく裂けた口元から大量の唾液が零れ落ちた。巨大  
が、レジーナの皮ジャンパーを荒々しい手つきで脱がせ  
た。巨大な手でレジーナの胸元を掴み、Tシャツを紙の  
ように引き裂いた。下着はつけていなかった。見事に盛



り上がった乳房が零れ落ちた。ジーンズを剥ぎ取り、小さな黒いパンティを引き裂いた。形のいい盛り上がった尻の膨らみが露になり、むっちりとした太腿の間に黒々とした陰毛が見えた。小麦色に日焼けした抜群のプロポーションが、巨人の手に掴み取られ、身悶えしていた。巨人がレジーナを逆さまにして剥き出しになった臍に武者振り付いた。ざらざらとした巨大な舌が、股間を這い回っていた。可憐なクリトリスを、音を立てて吸い上げた。

暫くの間、激しい愛撫が続いた。レジーナは声をあげて泣いていた。嗚咽が次第に喘ぎ声へと変わり始めた。異常な状況にあつて、レジーナは高ぶり始めていた。巨人のつばを得た巧みな舌の動きが、暗い欲情を引き出し

始めた。

巨人が動いた。ジーンを脱ぎ、アスファルトの路上に、胡座をかいて座った。黒々と凶凶しい巨大な男根が天を突いていた。先端は濡れて光っていた。

レジーナを前から抱き上げ、太腿を大きく開き、股間へと降ろしていった。

「ギャー！止めて。裂けちゃう！」

ミシミシという音が聞こえ、髪を振り乱し、顔を狂ったように前後左右に打ち振るった。両手で後頭部を抑え、背筋を大きく仰け反らせた。顔が見る間に蒼白になっていった。太さ五センチ以上はある男根を突き入れられた。下腹部は、大きく膨らんでいた。膣が裂けて、鮮血が太腿を伝い流れ落ちていた。巨人はゆっくりと腰を突き上

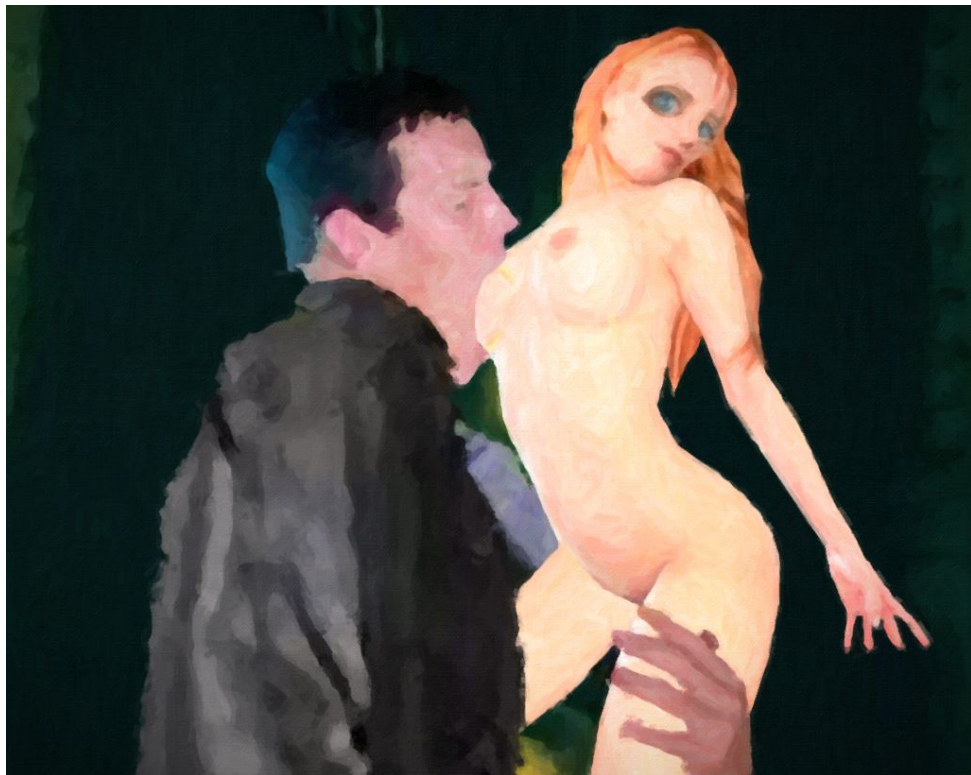
げ始めた。

「ああ……。お……」

レジーナの大きく開かれた口から、獣のような唸り声  
が漏れた。巨人は力つきてぐったりと後ろに仰け反った  
レジーナの胸を、顔に近付けた。大きく盛り上がった乳  
房を、まるごと口に含み、音を立ててしゃぶり始めた。  
暫く味を楽しんだ後、鋭い犬歯を乳房の根元に食い込ま  
せ、一噛みで食いちぎった。

絶叫が湧き上がり、レジーナは意識を失った。巨人は

「ぎゃー！」



美味そうに、柔肉を咀嚼しごくりと飲み込んだ。血塗れになった臆から男根を抜き去り、逆さまにした。後ろ向きにして、死にたくなるような美しい尻の膨らみに犬歯を食い込ませた。一噛みで肉塊を食いちぎり、クチャクチャと音を立てて咀嚼した。飲み込み食いちぎり、鮮血を啜った。尻肉を残さず食べきり、今度は、太腿を大きく広げ臆肉に食らいついた。臆肉を噛みきり満足そうに笑みを浮かべ、飲み込んだ。長い両足を、片足ずつ無造作にもぎ取り太腿に齧り付いた。柔らかい腹部を鋭い爪で引き裂き、湯気の立つ内臓に齧り付いた。

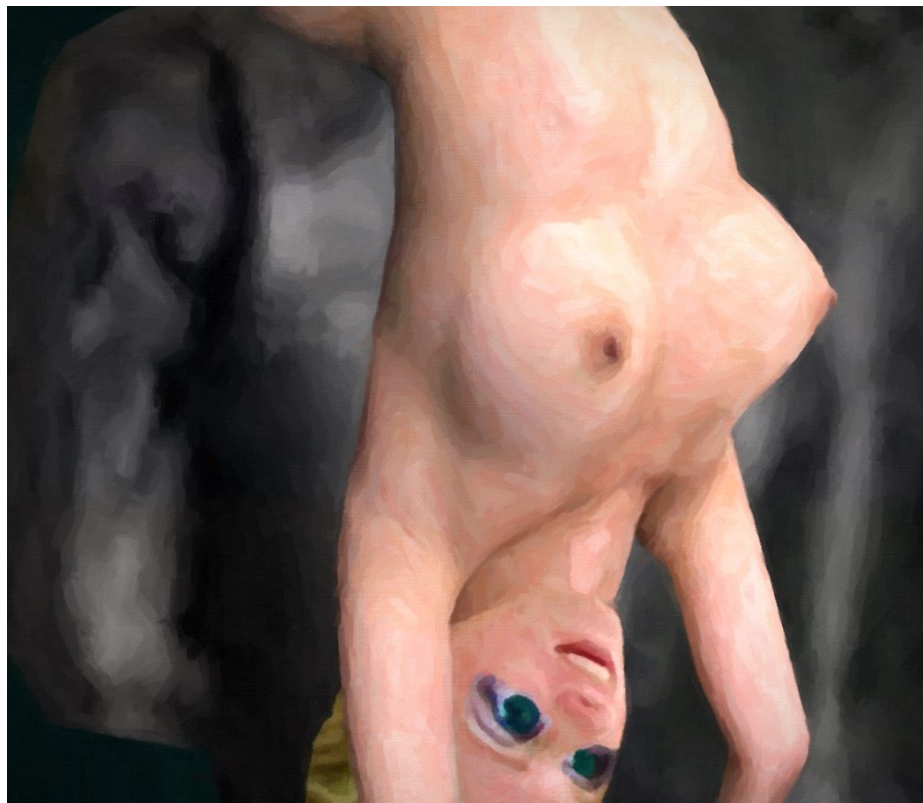
先ほどから、エレナは路上に腹ばいとなって一部始終を見ていた。本能はその場を一刻も早く離れるように警告していたが、全身に力が入らなかった。手足を虚し

くばたつかせる程度だった。また激しい尿意を覚えていた。巨人が味方とは考えられなかった。男達を無造作に殺し、女を生きたまま食らう様は、人間とは思えなかった。レジーナの主要な肉体を、胃袋に収めた巨人は大きなゲップをして、立ち上がった。レジーナの食いちぎられた死体が路上に散乱していた。ゆっくりとエレナの方に、振り向き近付き始めた。レジーナの生首をバキッと、音を立てて踏み潰した。すぐに、黒く大きな影が目の前を覆い尽くした。巨大で節くれだった指先がエレナの膺やアヌスを這い回った。男根より太い指先がアヌスに食い込んだ。

「嫌！食べないで。お願い……」

「今は満腹だ。お前は明日のダイナーにする」

巨人の顔は、元のエロティックで端正な顔立ちに戻っていた。エレナの両足首を、片手で一まとめに掴み、軽々と右肩に担ぎ上げた。両手を伸ばし、逆さまに吊り下げられたエレナは、まるで狩人に狩られた野ウサギだった。巨人は、電球が切れかけた小路をゆっくりとした足取りで歩き始めた。すぐに前方から、大型トラックがバックで近付いてきた。巨人の前で停車した。後方の荷室の扉が開けられた。巨人はエレナを肩に担いだまま、荷室に乗り込んだ。トラックは発進し何処とも無く走り去った。





## 第二章 女神達

大黒達也は、マンシヨンの自宅で、ひとり夕食の支度中であつた。ススキノの近くにある二条市場で仕入れて来た新鮮なホタテやホツキ貝を、さつとニンニクバターで炒め、軽く醬油をかけ、熱々のままレタスに和えるサラダを作っていた。他に増毛産の浜茹で毛蟹を、一匹皿に足を切り離れた状態で盛り付けた。午後六時、マンシヨンの窓からススキノの夕景が見える頃、夕食の準備が整った。居間のソファアーターブルに今夜のオカズを並べ、冷たく冷やしたグラスに缶ビールを注いだ。洗い髪が濡れていた。夕食前にシャワーを浴びていた。

海鮮サラダを一口つまみ、冷たいビールを喉に流し込んだ。極楽だった。肉がぎつしりと詰まったカニの足を

一本、ペロリと食べた。これも美味だ。

一緒に寝起きをともにしている近藤は、札幌市の近隣にある村営病院に通勤していた。後、一時間は帰らない筈であった。ビールが満たされているグラスを見詰めるうちに、何となくしんみりとした気分になった。

半年前のことを思い出していた。ミステリアスな美女加賀美京子との出会い、そして悪鬼のようなヴァンパイアとの死闘、それらが走馬灯のように記憶を走り抜けた。あの事件以来、大黒と近藤は、共に仕事と家庭を失っていた。

大黒は、職を失い東京に残してきた家族からも見放された。近藤も同じようなものだ。医院長を首になり、西野にある豪邸から追い出された。京子は、事件から一ヶ

月後、東京へと去っていった。

以前から興味があり、密かに応募していたテレビ局関係の仕事が決まったのだ。テレビ局と密接な繋がりがあ  
る親戚の有力者が動いたと聞いている。このマンション  
もただ同然の価格で、京子から譲り受けたものであった。

大黒は、首を振りビールを一気に喉に流し込んだ。瞑  
想を振り払い、ノートパソコンの電源を入れた。インタ  
ーネットに接続し、大黒が運営している会員制のアダル  
トサイトを立ちあげた。別れた妻に、財産の大半を引き  
渡した大黒にとって、唯一の収入源であった。女同士が  
繰り広げる、かなりハードなレイプシーンは、好評を博  
していた。メニューはレイプ、SMものに加えて、カニ  
バリズム描写を取り入れていた。

レイプシーンは、若い女が、スカートを捲られ、パンティを引き裂かれ、剥き出しとなった白い尻に極太の張り方を差し込まれるものや、泣き叫び許しを乞うひとりの美女が、大勢の女達によつて、陵辱されるもの等があった。

カニバリズム描写は、実際の食人シーンではなく、全裸でテーブルに横たわるグラマーな美女が、礼装に身を包んだ女達に、ナイフとフォークで切り刻まれようとしているシーンや、テーブルの上に四つん這いの姿勢で、手足を縛り付けられた美女が、背後からアヌスに串を打ち込まれようとしているシーンや、大なべに野菜と一緒に入れられ、茹で上げられるシーンを流していた。

モデル達は、ススキノ界限のホステスや、街で見つけ

た女達を起用していた。彼女達は手軽なアルバイト感覚で、美しいボディを惜しげも無くさらしてくれた。大黒は、監督、撮影、編集のすべてをこなしていた。ホームページをつくるのもすべて自前でやっていた。時に、興奮した女達を、一列に並べ犯すこともできた。

次にブラウザを立ちあげたまま、メニューバーからメニューを起動した。受信ボタンをクリックした。新規の会員登録申込みを確認し、入会方法を返信した。三十分ほどで作業を終え、ネットニュースを立ちあげた。

大黒は、カニバリズム関係のフォーラムを購読していた。新規に受信したニュースを開いた。ニューヨークから送信されたメールには、大量惨殺事件について書かれていた。若い女が何者かによって、食い殺された写真付

きであつた。最近、この種の猟奇事件が続発しており、犯人の手がかりがまったくつかめていないとも、書かれていた。

背筋に冷たいものを感じた。不意に、若い女を貪り食らう食人鬼の姿が脳裏に浮かび上がった。半年前、大黒と近藤の二人は、京子を救うために、ヴァンパイアの群れと死闘を繰り広げていた。その際に人肉を食らう食人鬼とも、生死をかけた戦いを演じた。

「馬鹿な……」

大黒は呟いた。犠牲者の生前の美しい顔写真と、食いちぎられた死体を見ているうちに、おかしな気分になつてきた。パンツを下げ、堅くなった男根を引き出し、ゆつくりと扱き始めた。

「達也。ひとりでやって、楽しいの？」

大黒は、背筋に氷のように冷たい気配を感じた。声に聞き覚えがあった。ベレッタM九三Rは、冷蔵庫の野菜室に隠してあった。もつとも声の主には、豆鉄砲ほどの威力も無いが。背後から、魅惑的な香水の香りがして、すぐに肉感的な身体が抱き付いてきた。背中に柔らかく豊かな乳房の膨らみを感じた。白魚のように白い指先が伸びてきて、男根に絡み付いた。大黒はごくりと生唾を飲み込んだ。

「美佐子。生きていたのか？」

大黒は首を後ろに回した。目の前に、美佐子の美しい顔が微笑んでいた。魅惑的な唇が近付き、舌を差し込んできた。舌を激しく絡ませながら、男根を扱いた。香水

の香りに隠れた成熟した女の匂いが鼻腔を、くすぐり股間をさらに熱くした。やつとの思いで、美佐子を押し戻した。

「何しに来たんだ。お礼参りのつもりか？」

「冷たい言い方ね。忘れたの？お嫁さんにしてくれるって言ったわよね」

「何のことだ？」

「しらばっくれるの？」

大黒は、美佐子との戦いの中で、うっかり口走った言葉を思い出していた。

「俺には妻子が……」

「嘘付きは何とかの始まりよ。奥さんと別れたくせに。

ちゃんと調はついているのよ」



美佐子は口元に淫らな笑みを浮かべながら、いつそう  
激しく男根を扱いた。

「……美佐子。逝きそうなんだ」

「いいわよ。逝って」

美佐子は、黒々と節くれだった男根を、ペロリと飲み  
込んだ。舌先で亀頭の周りを、包み込み、激しい勢いで  
顔を上下させた。大黒の背筋に電撃のような快感が走り  
抜けた。

「う……」

と呻き、美佐子の口中に、精液を迸らせた。美佐子は喉  
の奥でそれを受け、一滴も零さず飲み込んだ。

「美味しかったわ。貴方の味が一番好きよ」

大黒は無表情な顔で必死に対応策を検討していた。こ

のまま、すんなりと引き返す訳が無かった。少し様子を見ることにした。

「これから、毎日やってくれるか？」

「いいわよ。お尻の穴も舐めてあげるわ」

美佐子の顔がぱっと明るくなった。

「奥さんにしてくれるのね？」

「ああ。俺から言い出したことだからな」

「嬉しい」

美佐子のグラマーな肢体が、胸に飛び込んで来た。

「シャワーを浴びるか？」

「さっそく始める？」

美佐子は意味深な笑みを浮かべた。

「……」

「貴方にもう一つお願いがあるのよ？」

「……何だ？」

大黒は恐る恐る聞いた。脇の下が汗で濡れていた。

「仲間がいるの」

「仲間？」

「貴方が知っているヴァンパイアのように狂暴でないのよ。とっても大人しいの」

「そりゃあ、かまわないが……」

大黒は破れかぶれになっていた。ひとりふたりはもうどうでも良かった。それに近藤にまかせる手もあった。

「嬉しい。皆、主人のお許しが出たわ。入って来て！」

居間のドアが、音も無く開き、美佐子に劣らない美しい容姿を持ち、エロティックな雰囲気を漂わせる女達が、

大きなスーツケースを片手に持ち、微笑みながら入って来た。室内は若く美しい女達が発する甘く、扇情的な香りに満たされた。総勢二十名の女達が、美佐子と大黒のまわりを取り囲んだ。

「おめでとう。美佐子さん」

大黒は声の主を見て、驚きの表情を浮かべた。

「美由紀。生きていたのか？」

大杉美由紀、十九歳。半年前、ちょうど美佐子達と戦いを繰り広げていた頃に、知り合いになった。暴走族のリーダー的存在であった。出会いのきっかけは、大黒と近藤にちよっかいを出して、逆襲にあい、仲間をコテンパンにのされ、処女を奪われた。暫く交流は続いていたが、戦いの最中に行方不明となっていた。

「達也さん。元気そうね」

美由紀は見違えるほど色っぽく変身していた。以前も容姿は、美佐子達に劣らぬほど美しかったが、一段と磨きがかかったようだ。

「美由紀ちゃんなら、圭吾さんにお似合いかと思うわ」

「もったいないな。あいつには……」

「駄目よ。達也、貴方は」

「えへん。ところで、何だな。俺の商売も最近、景気がいいんだが、これだけのお嬢さん達を養うとなると……」

「お金のことなら心配しないで。経済的な負担はかけないから」

そう言いながら皆に目配せした。女達が、持っていた大きなスーツケースを開け始めた。中に札束がぎっしり詰

まっていた。ひとつに二億円はある筈だ。二十人ということ、四十億以上の現ナマということになる。大黒は喉の奥がカラカラに渴くのを感じた。

「全部で四十億あるわ。私達ができる商売の資金に使って欲しいの」

「わかった。俺にまかせろ。こうなったのも何かの縁だ。

ただし、善良な市民を殺すことだけは許さんぞ」

「もちろんよ。これでも反省しているのよ。誓約書もここに用意してきたわ」

美佐子がハンドバックから封書を取り出し、大黒に手渡した。大黒は中身にさっと目を通し、テーブルの上に置いた。

「ねえ。達也。シャワー浴びていいかしら」

「もちろんだ。自由に使ってくれ」

大黒が少し上擦った声で答えると、女達全員が衣服を脱ぎ始めた。下着もすべて脱ぎ去り全裸となった。そのうちの五人がバスルームに消えた。周りは白く美しい裸身に覆われていた。どちらを向いても、盛り上がった乳房や尻の膨らみが視線を貫いた。女達は、シャワーの順番を待つ間、大黒に近付き男根を触ったり、アヌスに指を入れたりした。抱き付いて、口に舌を入れてくる女もいた。女達は次第に大胆になり、大黒の身体をもみくちゃにした。

「お嬢さん達。もう少し優しくやってくれないか」

男根をふたりの女が交互にしゃぶっていた。アヌスに指を入れられた。凄まじい快感が湧き上がり、意識が混

濁した。

約一時間後、玄関の戸が乱暴に開けられた。

「大黒！貴様！俺のいない間に女を連れ込みやがって！

許さんぞ……」

ドタバタと廊下をかける音に続いて、居間のドアが開け放たれた。近藤は、己が目を信じられなかった。夢を見ている気分だった。部屋中が女の裸体で溢れており、足の踏み場も無かった。しかも、皆、若く美しくセクシ―な女達であった。強烈な香水の匂いに交じり、目も眩むような女の体臭が下半身を、熱くした。女の白い柔肉に交じり、黒々とした筋骨逞しい大黒の裸体が見えた。大黒は、大勢の女達に囲まれ、精を吸い尽くされたかのように惚けた顔をしていた。大黒の男根を旨そうに舐め



ていた女が、顔を上げた。目と目があつた。近藤は悲鳴を上げそうになった。

「美佐子……。あつ。用事を思い出した。大黒。ちよつと外出してくるからな……」

振り返ると妖艶な笑みを浮かべた全裸の美女が、戸口を塞いでいた。見覚えのある顔だった。

「久しぶりね。圭吾さん。一緒にシャワーを浴びようよ」

「み……。美由紀なのか？」

美由紀が立ち尽くす近藤の手を引いて、浴室に向かった。大黒は、男根をしゃぶっていた美佐子を押し倒し、覆い被さっていった。その上に女達の裸体が重ねられた。その周りでは、女達が互いの股間や乳房や尻を舐めあつていた。

室内は、二十人あまりの女達があげる喘ぎ声と、熱気に満ち溢れていた。大黒が女のような喘ぎ声を放った。精液が宙に迸った。

大型トラックの荷室は、三層に仕切られており、一室には巨人専用と思われる巨大な椅子と、テーブルが備え付けられていた。窓は無く、代わりにピカソ等の絵画が飾られていた。室内には、クラシックが流れていた。

巨人は、恐怖のあまり失神したエレナの裸体を、テーブルに横たえた。満足そうな笑みを浮かべ、乳房や尻を撫で回した。室内を仕切る壁にあるドアが音も無く開いた。戦闘服に身を包んだ美貌の女が立っていた。透き通るような白い肌に、流れるような金髪を持った女であった。

「お帰り。サムソン。狩りは楽しかったようね」

「ああ。マリア。どうだい、この獲物は？」

「最高ね。私にも味見させてね。で、どうやって食べるの？」

サムソンは、食い入るようにエレナの尻を見詰めた。

「そうだな。明日の晩、湖の辺でバーベキューにしよう」

「いいわね。最高のアイデアよ。それと夜食作っておいたけど、食べる？」

「さっき食べたばかりだが、何だかまた空いて来たようだ」

「すぐに持ってくるわね」

マリアは、エレナを軽々と抱き上げ、隣の部屋に移動した。そこは厨房になっていた。棚には大きな鍋やフラ

イパンが収納され、人ひとり入る位な巨大なオーブンが置かれていた。肉を焼いた香ばしい匂いが漂っていた。

調理用テーブルでは、調理服を着た長身でグラマーなラテン系の女が、忙しそうに巨大な皿に盛り付けを行っていた。レタスやセロリの上に、塩コショウで味付けをした乳房や臍や尻肉を載せていた。

「パトリシア。サムソンがお待ちかねよ」

「はいはい。もう少しよ。後、スープで終わり」

パトリシアは、ガスレンジの火にかけられた大鍋の蓋をあけた。濃厚な脂が浮かんでおり、シャモジで掻き回すと、野菜に交じり切り取られた乳房や毛のついた臍肉が見え隠れした。シャモジでスープをすくい、味見をした。

「OKのようね」

マリアは、キャスター付きテーブルに料理を載せて、運んでいくパトリシアの後ろ姿を見送った。それから、エレナに猿轡をかませ、人ひとりがぴったりと収まるシンクに横たえた。

ぬるま湯をかけながら、全身を洗剤のついたスポンジで洗い始めた。臍とアヌスは特に時間をかけて丹念に洗い清めた。うつ伏せの姿勢に寝かせた。目の前の美しい尻の膨らみを押し開き、舌でアヌスを舐り始めた。

暫くそれを続けた。アヌスが潤み始めた。シンクの下方からゴムホースを取り出し、エレナの白く盛り上がった尻を持ち上げ、先端をアヌスに差し込んだ。すぐに、ウイーンというモーター音が聞こえ、エレナの腹が「ゴボ

ゴボゴボ」という音を立てた。それは、腸内の汚物を取り出す、吸引装置であった。汚物を取り除いた後に、アヌスを洗浄し、腕に注射をした。腸や胃の活動を抑える薬であった。麻酔薬の成分も含まれており、意識が戻っても四肢を動かすことができない筈だ。それから、調理用テーブルにうつ伏せに寝かせた。

冷蔵庫を開けて、中から果物や野菜を細かく刻んでものを取り出し、エレナのアヌスと膣に詰め込み始めた。

リンゴ、バナナ、パイナップルそれにコーンやトマトを、指先で押し込んだ。愛液を滴らせた下の口が、旨そうに飲み込んでいった。すべてを挿入し、コルクで蓋をした。

これで下拵えは完了した。マリアは満足そうに目の前の、肉を見詰めていた。エレナは失神から目覚めていた。麻

酔薬のせいと身体はまったく利かないようだ。目に  
にっぱい涙を溜めて、何かを訴えるような眼差しでマ  
リアを見詰めた。





「お目覚めね。子豚ちゃん。美味しく料理してあげるわね」

マリアは、壁に備え付けの食料庫の扉を開けた。中は、二層になっていて上の層には年若い美しい女が全裸姿で横たわっていた。

大きな胸が、静かに上下していた。

「はい。涼子。明日の朝まで待っててね。美味しく食べてあげるからね」

マリアは、やさしく女に話し掛け、エレナを軽々と抱き上げて、下の層に横たえた。

「おやすみなさい」

頬にキスをして、扉を閉めた。讚美歌を口ずさみながら、隣の部屋に通じるドアを開けた。六名の全裸になっ

た女達が、二段ベッドで痴態を繰り広げていた。床には戦闘服が無造作に脱ぎ捨てられていた。

「まったく。しょうの無い娘達ね。後で私も入れてね」

その部屋を後にして、サムソンの部屋に戻った。部屋ではサムソンがひとり夜食を食べていた。パトリシアの姿が見えなかった。見るとテーブルが小刻みに揺れている。下を覗いてみると、パトリシアがサムソンの巨大な男根を、美味しそうに舐めていた。

「旨いぞ。マリヤも一口どうだ？」

マリヤは頷き、サムソンがフォークに刺した乳房に齧り付いた。柔らかい脂身が舌の上でとろけそうだった。

マリヤは自分の盛り上がった胸をじっと見詰めた。自分の乳房もこんなに美味なのだろうか、ふと思った。そ

れからズボンを下げ、テーブルの上に四つん這いになり、サムソンに白く脂ののった尻を向けた。ガラガラした大きな舌が、割れ目をなぞるように舐めてきた。

「デザートよ……」

マリアはサムソンに尻から貪り食われる夢想到に浸っていた。尻を舐められながら、自分で乳房を揉み、臍に指を這わせた。

### 第三章 計画

午前十時、ススキノの南寄り、中島公園近くの空きビルの前に、黒塗りのベンツがパーキングランプを点灯させ、停車していた。ベンツの近くでは、ダークスーツに身を包み、サングラスをかけた二人の長身の男達が、空きビルを、下から眺めていた。

「大黒。見せたいものがあるって言ってたのは、これのことか？」

「そうだ。なかなかいいだろう？」

「何がだ。古臭いオンボロビルだろうか」

「見た目はな。金をかけたら大した美人になるぜ」

近藤はサングラスを外し、大黒の顔をまじまじと見詰

めた。目の下に大きな隅ができていた。

「本気か？」

「当たり前だろう。俺は美佐子から金の使い道をまかさ  
れているんだ」

「で、このビルで何しようというんだ？」

今度は、大黒が、サングラス越しに近藤の顔を見た。

「お前、まだわからないのか？ここは何処だ？」

「何処って、お前。ススキノに決まっているだろうが」

「そうだ。男と女の欲望が渦巻く、大歓楽街だ。美佐子  
クラスの超のつく美女が二十人いるんだぜ」

「お、お前まさか、ヴァンパイアの女達で、水商売をや  
ろうとしているのか？」

「血の巡りの悪いお前にもやっとわかったか。大繁盛間  
違い無だ」

「だけど、大黒ちゃん。美佐子達の食事はどうするんだ？  
二十人もいるんだぜ」

「血のことか？そんなの客達から掠め取ればいいんだ」

「お、お前は、レンフィールドか！」

レンフィールドとは、吸血鬼ドラキュラの僕であった

男だ。

「健康に害の無い程度さ。その分、大サービスってのは、

どうだ？」

近藤は、大黒の横顔をまじまじと見詰めた。

「嫌なら抜けてもらってもいいんだぜ」

大黒は、抜け目なさそうな笑みを浮かべた。

「貴様に四十億の現ナマと、極上の女達を一人占めにさ

せてたまるか」

「これで決まりだな。不動産屋には話がついている。鍵も借りてある」

「まったく、抜け目の無い野郎だぜ」

二人は肩を並べ、ビルの正面玄関の扉を開け中に入った。

「一、二階は吹き抜けにして、店舗にするつもりだ」

「店舗？」

「キャバクラとスナックの中間的なものを考えている」

「後で、詳しく聞かせろ」

二人は、エレベータに乗り、最上階の五階まで一気に上った。そこからは階段を使って屋上に出た。広さは二百坪ほどだ。

「ここには、空中庭園を作るつもりだ。土を入れて広葉

樹を植え、花園を作る。真ん中には、プールを作り、プールサイドには……」

「女達を裸ではべらすんだろう」

近藤が、息がかかるほど顔を近づけた。

「お前、何だか急に乗り気になったな」

「当たり前だ。で、そうなんだな？」

「美佐子に言っておくよ」

眼下に中島公園の緑が見えた。公園を挟んで、大黒達のマンションが見えた。今頃、女達は女同士で楽しんでいる筈だ。ヴァンパイアの性欲には限度というものがない。昨夜は、一晩中女達に抱かれた。身体中にキスマークができていた。

「で、三階から五階はどうするんだ？」



近藤が、大黒を現実に戻した。

「俺達と女達の個室を作るつもりだ」

「広すぎやしないか」

「計画はまだあるんだ」

「何だ？」

近藤が目を輝かせて、大黒の顔を見詰めた。

「女達には新鮮な血液が必要だ」

「さつき、客から掠め取るといったらどう」

「そうだ。そのつもりだ。しかし、それにも限度がある。

安定的に供給できる手段が必要だ」

「まさか……」

「そのまさかさ。三階、四階は、独身者専用賃貸マンションにするつもりだ。入居者は二十代前半の美人に限定

する。家賃は格安、それに賄いつきだ」

「美人だって！どうやって募集するんだ」

近藤が、唾を飛ばした。飛沫が大黒の顔にかかった。

「汚ねえな……。通常どおりさ。独身者と年齢制限くらいはするかな。後は、面接で判断する。申込者を案内する時に入居希望者が殺到しているので抽選という話をするのさ。後は、気に入れば入居を許可すればいい」

「お前、いつからそんなに悪知恵が働くようになったんだ」

近藤は、呆れ顔で言った。

「絶対にうまくいくぜ。最低六十人は募集するつもりだ。ヴァンパイア二十人だから、一人につき三人の計算だ」

「だけど。大黒。すけべなオヤジどもの血をくすねるの

はかまわないが、若い女を騙すのは、気が引けるな」

「大丈夫だって。採血量は三ヶ月間でひとり当たり四百CCだ。献血の基準と同じだ」

「だが、どうやって採血するんだ」

「それは、女達に任せる。ヴァンパイアなら簡単な筈だ。

それより、想像してみろ。八十人の美女達に囲まれた生

活を……」

「……立ちっぱなしだな」

二人は、溜息をついた。

ビルの改修計画は、その翌日から実施されることになった。大黒は不動産業者に大金をちらつかせて、十月までに三ヶ月で完了するように、交渉を成立させた。改修

工事は急ピッチで進められた。工事の進捗状況を確認することが、大黒の日課となった。工事も終盤を迎えた頃、大黒と近藤の二人は、壁の改修を実施中の店舗となる吹き抜けの部屋で、ニヤケタ顔をして談笑していた。パラダイスの完成は間近であった。

「お二人に相談があるんですけど」

二人は、振り向いた。女達の中で十九歳と、最年少の真由美が、妖艶な笑みを浮かべていた。太腿丸出しの超ミニスカート姿だった。白いシャツの上に薄皮のコートを羽織っていた。シャツの胸元の隆起が目飛び込んできた。

「どうしたの？真由美ちゃん」

「美佐子と美由紀のことなんだけど」

「立ち話もなんなん。近くのホテルに旨いコーヒーを飲ませる店があるんだが行かないか？」

「いいわよ」

三人は並んで、ビルを後にした。ホテル一階にあるラウンジは、挽きたてのコーヒーの香りで満ちていた。チエックインの時間であると言うのに、空いており大黒達以外の客は、女性客ひとりが窓際の席に座っているだけであった。真由美は、一番奥にある席を希望した。クッションの効いた四人掛けの椅子に、真由美を真ん中にして座った。三人ともコーヒーを注文した。

「ところで、相談って何なの？」

大黒が、リラックスした表情で聞いた。

「美佐子と、美由紀の披露宴をあげたいんだけど」

「ぶっ……」

近藤が飲んでいた水を吹き出した。

「汚いぞ。近藤！……真由美ちゃん。今なんて言ったのかな」

大黒が、どさくさに紛れて、真由美の白魚のような手を握った。

「だから、貴方達と美佐子達との披露宴を企画しているのよ」

「だけどね。真由美ちゃん。俺達もうすぐ四十になるうとしているオジンがね……」

大黒は、目の前に置かれた灰皿を、手で弄びながら答えた。

「貴方達は、経験者だけど、二人は始めてなのよ。女に

とつてウェディングドレスを着る意味がどんなものであるかわかるかしら……」

真由美の瞳は次第に熱を帯びてきた。大黒と近藤は、顔を見合わせ、溜息をついた。

「で、式はいつを予定しているの？」

大黒が気の無い声で言った。

「本当。了解してくれたのね！」

「真由美ちゃんに頼まれたら、嫌とは言えないからね」

近藤が、満面の笑みを浮かべる真由美のむっちりとしてすべすべな太腿を触った。

「私達のビルのお披露目の前にやろうと思うのだけど。」

場所は、店舗となるところで、出席者は近親者のみとしたいんだけど」

「まかせるよ。店を使うなら、家具が入る前がいいな。  
結婚式に似合いのデザインではないからな」

「そうするわ。でね。お料理なんだけど。ちょっと見て  
くれない」

真由美は、バックから一枚の色紙を取り出した。

「ほう。料理は和洋折衷か。いいね。焼きタラバか。こ  
いつは好物なんだ」

大黒が真由美のスカートに、空いている方の手を入れ  
て、パンティの隙間に指を忍び込ませた。臍に優しく指  
先を挿入した。中は、すでに愛液で潤んでいた。

「メインディッシュは何なのかな」

近藤が大黒から、メニューリストを引っ手繰った。

「佐藤香織、二十二歳か、旨そうだね……何だって！」



近藤は素っ頓狂な声を上げた。

「真由美ちゃん。冗談きついよ」

大黒が真由美の横顔をまじまじと見詰めた。真由美の太腿が大黒の手を挟み込んだ。メニューリストには、十人のうら若い女達の名前が、メインディッシュとして書きつらねられていた。

「約束忘れたのかい？」

大黒の声には刺が含まれていた。

「約束って誓約書のこと？忘れていないわよ。確か、善人は殺さないとなっていたわよね」

大黒と、近藤が顔を見合わせた。

「この娘達は善人じゃないと言うのかい？」

大黒が努めて明るさを装うような笑みを浮かべた。

「香織って娘はね。男のために両親を殺しているのよ。」

涼子は、性的欲求のために何人もの若い女を、蹴り殺しにしているし、小百合は、生まれたばかりの赤ちゃんをベランダから……」

「もういいよ……」

近藤が遮った。

「私達はね。悪人しか殺さないことにしたの。それにこれは長老の命令なのよ」

「長老って？そう言えば出席者のリストは見えていないな」

「そうそう、ごめんなさい」

真由美はバックからも一枚の紙を取り出した。リストには百名あまりの名前が連なっていた。女達以外始め

て目にする名ばかりだった。

「もしかして、真由美ちゃん。言い難いんだけど。この人達はお仲間なの？」

近藤が真由美の太腿の間に手を差し入れた。パンティに指先を忍び込ませ、アヌスに指先を入れた。

「そうよ。日本中から、まともな人ばかり集めたのよ。

長老は、何百年も生きていて、私達の中心的存在なの。

彼には逆らえないわ。……ああ……いい、そこよ……」

大黒と近藤は呆然とした表情で、運ばれて来たコーヒの湯気を見ていた。日本各地に吸血鬼が棲息し、長老と呼ばれる男が彼らを束ねているということは、美佐子からも聞いていなかった。パラダイスの夢が砂上の楼閣に思えた。

心とは裏腹に、二人の指先は忙しく動いていた。

その後、三人は、ホテルにひとつの部屋をとった。大黒と近藤の二人が、弾けるように瑞々しい真由美の全身を手と口で思う存分に嬲り、前後から貫いたのは言うまでもない。

## 第四章 披露宴

「新郎、新婦入場です」

式場内に、華やかに着飾った司会者の真由美の声が流れた。両開きの扉が開けられ、純白のウェディングドレスを着て、満面の笑みを浮かべる美佐子と美由紀と、彼女達と腕を組み白のタキシードに身を包んだ大黒、近藤が、神妙な面持ちをして現れた。

一斉にクラッカーが鳴らされ、式場内に紙吹雪が宙を舞った。大黒は、照明を落とした場内を見渡した。自然に鳥肌が立った。百人以上のヴァンパイア達が彼らをじっと見詰めていた。ヴァンパイア達の目が、暗い式場内に、燃えるように赤く光り輝いていた。彼らは、壇上に設置された席に向かってゆっくりと歩き出した。スポット

トライトが彼らの後を追った。

大黒達の媒酌人を務める長老と呼ばれる初老の男が席を立った。

「かくも盛大で厳粛な宴にお集まりいただきました紳士そして淑女の皆様。今宵は闇の種族である我々にとりまして、輝かしい新たなる門出となるでしょう。私は、かねてより人類との共存を願っておりました。我々は、人々から忌み嫌われ、恐れられ迫害されてまいりました。確かに我らは血なくては生きていくことができないのは事実であります。しかし、我々も、人と同じように愛し愛されることも、傷つき悲しみに暮れることもあります。

同じなのです……」

披露宴会場に万雷の拍手が鳴り響いた。白いタキシ―

ドに身を包んだ大黒と近藤の二人は、艶やかに着飾った美佐子と美由紀の隣で、神妙な面持ちで耳を傾けていた。大黒は先ほどから、トイレに行くのを我慢していた。どうしても場の雰囲気になじめなかった。

目の前には、百人以上の伝説では悪鬼と恐れられるヴァンパイア達が、長老の話に耳を傾けていた。男は長身で、髪をオールバックにまとめ、青白い顔をしている以外これといった特徴は無かった。

「さて、我らが希望の星であり美しく気高い心の持ち主である美佐子君と美由紀君のふたりは、素晴らしい伴侶を見つけてくれました。ここで大黒、近藤両氏の略歴につきまして……」

近藤は、そわそわしながらも、進行役を務める真由美

の、ドレスからはみ出た長い太腿が気になっていた。氣配を察してか美由紀が、近藤の股間を強く握りしめた。

「うっ……」

危うく声が出そうになった。

「それでは乾杯しましょう」

参列者は、長老の掛け声で立ち上がり、赤い液体が満たされたワイングラスを前に掲げた。

「乾杯！」「乾杯！」「乾杯！」

皆、美味そうに、一気に飲み干した。大黒と近藤の二人も、赤ワインの満たされたグラスを一気に空けた。こうなったら自棄だ。ヴァンパイア達に仕える給仕達によって、次々に運ばれる豪華料理の数々をつまみながら、冷えたビールをガンガンと喉に流し込んだ。時折、新婦



達が心配するような視線を向けてきたが、気にしなかった。

式がピークに達した頃、式場の扉が開けられ、十名の宴会係がキャスター付きテーブルを押ししながら、入ってきた。テーブルの上には、白いシートをかぶせられたものが載せられていた。見ると微かに動いていた。

宴会係が、シートを一斉に取り除いた。

「ヒュー。ヒュー」

「イエーイ」

会場内は、出席者があげる歓声で騒然となった。テーブルの上には、全裸で両手両足を縛られた女達が、横たわっていた。皆、若く美しい容姿をしていた。薬でも打たれているのか、視線が定まらず、手足を弱々しく動かす程度であった。真由美が言うように、凶悪犯罪者のよ

うには見えなかった。出席者達は、回転テーブルに横たわる瑞々しく、豊満な肢体を持った女達の身体を一斉に触りまくった。仰向けに寝かせた女の股間に顔を押し付け、舌で舐りまわすものや、うつ伏せにして豊かな尻の合間に顔をつけ、アヌスに舌を入れるものなど、場内は収集がつかなくなった。

大黒達のテーブルにも、モデルのように若く美しい女が、載せられた。しかし、式の主役である大黒と近藤は、新婦の太腿に頭を載せ、深い寝息を立てていた。幹事役の真由美が、気を利かせてというか、大黒達の行動を予想して、ビールに睡眠薬を仕込んでいたのであった。

長老が、目を輝かせ女の豊かな乳房を片手で揉み始めた。空いている方の手を女の無防備な股間に差込、膣に

指を入れかきまわした。

「うっ……ああ……あ」

目を閉じて、浅い眠りの中にいた女が低い喘ぎ声をあげた。指を抜き、愛液に濡れた先端を口に含んだ。

「若い女の味は何と美味なことか」

そう呟いた。今、売り出し中の女優によく似た長老の妻が、女の瞳に口を付け、ピチャピチャといういやらしい音を立てて舐り始めた。

「本当ね。美味しいわ。ねえ貴方、この女のクリトリス食べていい？」

一方、他のテーブルでは、ひとりの男が、意識の朦朧としている全裸の女を背後からかき抱き、首筋に齧り付いていた。男の手は、豊かに盛り上がった乳房を揉み、

むっちりとした太腿の合間にある膣に入れられていた。

口元から真っ赤な血がタラリと零れ落ちた。隣に座って

いた女が、男に女を早く渡すように催促していた。男は、

舌打ちをして女を、手渡した。女は、全裸の女をテーブ

ルに座らせて、太腿を押し広げ膣肉に噛み付き、噛み千

切った。

「ギャー！」

女が絶叫し、全身を震わせ、白目を剥いて失神した。

女は、噛み裂かれた膣に口をつけて零れ落ちる鮮血を喉

に流し込んでいた。隣のテーブルでは、仰向けに横たわ

る全裸の女に、周りに座っている出席者達が、一斉に齧

り付いた。

血しぶきがあがり、両手両足を取り押さえられている

女が背筋を仰け反らせた。

首筋、脇の下、柔らかな腹部、盛り上がった形のいい乳房、太腿、臍と、あらゆる部位に鋭い犬歯を突き立て、皮膚を噛み裂き、流れ出る鮮血を、喉を鳴らして食べるように飲んでいた。さらに隣のテーブルでは、女がテーブルの上に乗っかって、四つん這いの姿勢をとらされていた。女の尻の合間に、男が顔を入れ、アヌスを舐めていた。

「ギャー！」

突然、女が仰け反り式場に響き渡る絶叫をあげた。アヌスを舐っていた男の口元から鮮血が溢れ出した。男が女のアヌスを噛み裂いたのだ。近くで食い入るように見詰めていた女が、全身を苦しそうに震わせる女の乳房に噛み付き、乳頭をガブリと噛み切った。流れ出る血を、

美味そうに飲みながら、着ていた服を脱ぎ始めた。下着もすべて脱ぎさり全裸となった。隣に座っていた男が、立ち上がり、女の尻を抱き寄せ、男根を奥深くまで差しこんだ。

式場内は、料理として供された女達があげる断末魔とヴァンパイア達があげる歓声や喘ぎ声で騒然となっていた。男も女も全裸となり、相手を選ばず、床に横たわり乱交を始めた。テーブルの上には、すっかり血を抜き取られ、無残に引き裂かれた女達の死体が横たわっていた。

大黒達の結婚式が終わり、二週間が経過していた。街の木々も赤や黄色に色付き、すっかり秋めいていた。ビルも完成し、商売がスタートしていた。順調な滑り出し

であった。ビルの名称は第二ヘブンビルとした。店の名前は、Timeというシンプルなものにした。どちらも大黒のアイデアであった。

近藤は最初にビル名を聞いた時、顔色を変えた。ヘブンビルとは、半年前にヴァンパイアの群れと決死の死闘を行った場所であった。美佐子達は、それを聞いて謎めいた笑みを浮かべるだけであった。宣伝に、新聞雑誌等のマスメディアを利用した訳ではないが、絶世の美女達が懇切丁寧な接客サービスをしてくれるとあって、口コミで客が客を呼び込んでいた。開店の六時には、常に満席状態となった。

改装が済んだばかりの百坪ほどの店内には、低い壁で仕切られ独立したボックス席が十ヶ設けられ、中央には

アトラクション用のステージが設置されていた。店の特徴は、一言で言えば、キャバクラとヘルスをミックスしたようなものだ。女達は、薄く透けるような生地ですきた太腿丸出しのコスチュームを着ていた。大黒のアイデアで、女達のひとりが日替わりでノーパン、ノーブラで客を接待することになっていた。その女に当たった客が最高にラッキーという訳だ。

時刻は午後九時をまわっていた。ボックス席では、女達が客に濃厚なサービスを行っていた。客達は皆、女の尻や胸を触りながら、女との会話や酒や料理を楽しんでいた。普段では接することのできない美女の秘部を心置きなく自由にできるのだ。ある女は、全裸になり男の腰にのっっていた。腰を淫らにくねらせていた。結合してい



るのは暗闇でも見透かせた。

ヴァンパイアは妊娠することが、ほとんど無い。彼らは、本来が不妊症であるが、排卵自体を意思の力でコントロールすることができた。ヴァンパイアウイルスの力によって、当然、性病にも無縁であった。エイズに感染することも無い。自然に、SEXは奔放になった。

その日は珍しく女性客が来ていた。二十代前半で、四肢が長く容姿も申し分の無い、いい女であった。美佐子と美由紀二人で相手をしていた。他の女達は、羨望の眼差しで見ていた。中年オヤジや酔客ばかりの中で、その女は宝石のように美しく輝いていた。美佐子が、全裸に

した女を後ろからかき抱き、女の乳房を揉みながら、膺を指先で蹴っていた。美由紀が、テーブルの上に四つん這いとなって、剥き出しにした尻を女に与えていた。女は喘ぎながら美由紀の尻の割れ目に顔を押し込み、膺やアヌスを舐っていた。

その頃、店に隣接した事務室では、大黒と近藤それに、真由美とアリサの四人が麻雀をしていた。女達は二人とも乳房を露出させ半裸状態で卓を囲んでいた。大黒が考案したルールで、振り込みをした者は一枚ずつ衣服を脱いでいくというものであった。パンティやブラジャー等の下着の他、薄いコスチュームだけを纏った女達には不利であった。麻雀卓が時より小刻みに揺れた。卓の下で

は全裸の京子と礼子が大黒と近藤の剥き出しになった男根を呑み込み、口腔性交を行っていた。

「私が勝ったら、血液五百CCよ。チ\*ポから吸わせてね」

真由美が、盲パイしながら呟いた。

「いいぜ。勝てたらな。白いのも一緒に飲ませてやる」  
大黒が、そう言い、冷たく冷やしたビールを喉に流し込んだ。  
んだ。

「リーチ！」

真由美が声をあげた。

「それ当たりだ」

先ほどから無言で牌を打っていた近藤が目を輝かせた。

「うっ。もう圭吾ちゃんたら。素人相手にして。ちよっ

とは遠慮したら……」

真由美はそう呟きながら立ち上がり、後ろ向きになって最後の一枚であるパンティを、腰を淫らにくねらせながら、脱いでいった。すぐに、白く盛り上がった美尻が露になった。真由美は雀卓の上に座り、見るからに美味しそうな尻で、麻雀牌やテンボウを踏み付けた。

「約束だったよね。真由美ちゃん。清算させてもらうよ。

アヌスへのフィスト・ファックは始めてだったよね」

「優しくしてよ。お願いだから……」

近藤が卑猥な笑みを浮かべて、真由美の手を引いて、事務室隣の休憩室に消えた。そこは、バスシャワーを完備し特大のダブルベッドが置かれていた。

「俺達も一休みするか？何か飲むか？カクテルでも」

大黒が残された女達に声をかけた。その時、ドアが乱暴に開けられ、ボーイの光二が息を弾ませ入って来た。光二は美佐子の使い走りをやらされていた若者で二十歳を過ぎたばかりであった。

「兄貴。大変です。ヤクザが店で暴れています」

「何だと。人が寛いでいる時に何処の馬鹿野郎だ！」

大黒は言うが早いか、部屋を飛び出した。店では、ダークスーツにパンチパーマと、一目でその筋の者とわかる男達五人がひとつのボックス席に五人の女達を、引きずり込みシタイ放題に嬲っていた。女達は皆、全裸に剥かれていた。

美佐子や美由紀もその中に交じっていた。二人はテーブルに四つん這いにさせられ、舌でアヌスを舐られている

た。

新妻である美佐子が嬲られているのを見て、大黒は一瞬かっとなったが、美佐子の表情を見て、興奮が覚めた。

美佐子はこんなヤクザ等、やろうと思えば一瞬のうちに葬りされるのだ。むしろ状況を楽しんでいるかのような感じであった。他の女達は、椅子の上で男達に抱かれるようにして臆やアヌスを男根で貫かれていた。

「お客様。お願いでございます。他のお客様の迷惑になりますので……」

大黒が、男達の中で最年長と思われる中年の男に声をかけた。男が美佐子の尻の合間から、顔をあげた。男の顔は、美佐子の愛液で濡れていた。

「オメエが、支配人か？」

「はい。大黒と申します」

「誰の許可を得て、ここで商売しているんだ？」

男は、ドスの効いた声で言い、目の前の剥き出しにされた美佐子の臍に指先を挿入し、搔き回した。美佐子の盛り上がった白い尻が、気持ちよさそうに動いていた。

美佐子は大黒の目をちらりと盗み見た。

「あの。お言葉ですが、ここでは他のお客様に迷惑がかかりますので、事務所の方にご足労願えませんでしょうか？」

大黒が、媚びるような笑みを浮かべた。

「事務所に来いだと。この野郎。いい度胸だ。行くぞ、

お前達」

男達は、それぞれが蹴っていた女の手を掴み立ちあが

った。女を引き摺りながら大黒の後に続いた。事務所に  
は、近藤、真由美、京子、礼子の四人の姿があつた。女  
達三人は全裸で、ソファの長椅子に腰掛けていた。真由  
美は、とろんとした、俗に言う、逝つた時の表情を浮か  
べ、京子と礼子に両側から挟まれるようにして座ってい  
た。京子と礼子は、意識が朦朧としている真由美の裸身  
をここぞとばかりに弄んでいた。両足を持ち上げられ、  
剥き出しにされたアヌスは、近藤によるフィスト・ファ  
ックのためか赤く腫れ上がっていた。近藤は事務所の奥  
にあるカウンターの途中で、カクテルを作っていた。

「この店はどうなっているんだ。めちやくちやいい女が  
ワンサカといて、しかも皆淫乱ときてやがる」

先ほどの男が、事務所に入るなり声をあげた。事務所



は十人以上の男女でいっぱいになった。京子達が、ソファを立ち、近藤がいるカウンターのの中に入った。男が、ソファに腰掛け、膝の上に美佐子をうつ伏せに横たえた。手下の者達が、女達を抱きかかえるようにして、長椅子の後ろに立った。

「俺は、鬼頭組の若頭で、遠藤という者だ」

手で忙しそうに、美佐子の白く盛り上がった尻を撫で回しながら言った。

「この辺りは、鬼頭組のシマということを知った上で商売しているのかい。兄さんは？」

下から睨み付けるように、ドスの効いた声で言った。

「はい。申し訳ございません。この世界に入って、日が浅いもので……」

「何だと！聞いた口をききやがって……。まあ、いいだろう。これからゆっくり教育してやるからな。とりあえず、今日のところは、帰ってやる。そのかわり今日の売り上げを全部よこしな。それとこの女達はいただいていくからな」

「はっ？女達をどうするんですか？」

「決まっているだろうが。さんざんにまわした後、シャブ付けにしてうちの店で働いてもらうのさ」

「仕方が無いですね。美佐子。お客さん達に丁重にお礼をしてあげなさい」

「何だって！……」

遠藤の声が終わらぬうちに、美佐子の裸身が、稲妻のように動き、遠藤の首を太腿で挟み込み、床に手をつい

た。遠藤の身体が宙を飛び、コンクリートの壁に背中から激突した。ソファの後ろに立っていた女達も、低い唸り声をあげ一斉に男達に襲い掛かった。白い裸身が、男達の間を、電撃のように動いた。腹部を強打され床に崩れ落ちる者、顔面を拳で突かれ、顎を碎かれる者等、一瞬のうちに、屈強な男達が床の上で悶絶していた。美佐子が、床で伸びている遠藤の顔に裸の尻で腰掛けた。

「で、どうするの？支配人さん？」

「そうだな。半殺しの目に遭わせて、裏の路地に放り出すか」

「駄目よ。殺して！」

美佐子は大黒の顔を下から、睨み付けるように言った。

「殺せだって！美佐子、もとへ、美佐子さん。俺達はギ

ヤングじゃないんだよ」

近藤がカウンターの中から、情けない声を出した。

「甘いよね。圭吾さん。こいつらは暴力団よ。こんな目に遭わされてすんなり諦めると思うの？」

「……」

「暴力団っていうのは、個々には拳法の達人も、銃のノウハウもないけど、組織力があるのよ。一度狙った獲物は絶対に逃がさないわ。それこそ二十四時間ひっきりなしよ。貴方達が大事にしている女の娘達も狙われるわ。散々に犯された後に絞め殺されるのよ」

「わかったよ。美佐子。これは俺達が仕掛けたわけじゃないが。殺るか殺られるかの戦争なんだな？」

大黒はそう言うと、懐から鍵を取り出し、それで事務

机の引き出しを開けた。中から、ベレッタM九三Rと筒型のサイレンサーを取り出し、ベレッタにサイレンサーを装着した。銃口を男達のひとりに向けた。

「待つて。こいつらの始末は私達に任せて。貴方達二人は襲撃の準備をして」

「襲撃？」

大黒が、美佐子の顔をじつと見詰めた。

「こいつらのバックには鬼頭組が控えているのよ。手下を殺されて黙っているわけがないわ」

「組員を皆殺しにするのか？」

大黒が低く重い声で言った。

「そうよ」

美佐子の冷たい声が事務所内に、空ろに響いた。

大黒と近藤の二人は、地下にある広さ二十畳ほどの倉庫にいた。大黒が、金属製のロッカーの扉を開けた。中には、拳銃やショットガンはては自動小銃までの様々な銃器が、フックに掛けられ収まっていた。すべて美佐子達の金で、闇ルートから仕入れた物であった。大黒は、その中から、イングラムM十を取り出した。四十五口径、千発／分の発射速度を誇る高性能サブマシンガンだ。イングラムM十の銃身には馬鹿でかい円筒状のサイレンサーが装着されていた。

さらに、三十連マガジンを三本取り出し、イングラムと一緒にポストンバッグに詰め込んだ。腰のベルトに差していたサイレンサー付きのベレッタM九三Fを、シヨルダホルスターに収めた。二十連マガジンを、三本取り

出し、皮ジャンパーの胸ポケットに無造作な感じで突っ込んだ。

一方、近藤は日本刀三振りを、隣のロッカーから取り出し、倉庫の中央に置かれている作業台に載せた。

「二刀流というのは、聞いたことがあるが、三刀流とは珍しいな」

その様子を見ていた大黒が、言った。

「二本は予備だ。人を五人も切れば、脂がついて切れなくなるからな」

「そうか。時間までまだ間があるな。酒でも飲むか？」

大黒が先ほどのボストンバッグから、ウイスキーのボトルを取り出し近藤に渡した。

「ツマミは無しか？」

そう呟き、一口、飲んだ。

「しかし。大黒よ。俺達本当にこれで良かったのか？」

「何がだ？」

大黒は、近藤からボトルを受け取り、一口を喉に流し

込んだ。

「何って。暴力団を襲撃するとは夢にも思わなかったぜ」

「そうか。一年前に美佐子達を襲撃した時の方が、ビビ

ツタがな」

「そりゃそうだ。ヘブンビルのドアを車で突き破った時

は、小便ちびりそうだったぜ」

「あのな。近藤。俺は美佐子が正しいと思うんだ。まあ、

聞けよ。仮にだ。一般市民が暴力団に狙われたらどうす

る。いやどうなると言った方がいいかな」



「どうなるたって、警察に頼るしかあるまい」

「そうだ。だがな、暴力団が本気で狙ったら警察は守り切れると思うか？大体、今の法律では、怪しいというだけでは、しょつ引くことはできないんだぜ。あつさり、殺されて闇に葬り去られるのが関の山だな」

「だから、武装して戦えと言うのか？」

「一般市民では無理だ。武器も無い、技術も無いからな。」

俺達はどうか。戦争ができるくらいの武器はあるし、戦鬪の経験もある。俺はある意味、アメリカ社会が好きだ。

市民は自衛のために銃を持てるからな。暴力団だって相手が武装していればそう簡単には手出しできない。とど詰まり、俺達はこれからも生きていきたい。せつかく築いた天国がむざむざと破壊されるのを見ているわけに

はいかないんだ」

時刻は午前二時を過ぎていた。店の閉店時間は一時だ。襲撃の時間は二時であった。大黒と近藤の二人は、倉庫で酒を飲んだ後に、その場で三時間ほど仮眠を取った。

目覚めてから美佐子達を探しに事務所に上がった。事務机の上に、「地下室」と書かれたメモが置かれていた。

二人は、とりあえず地下の倉庫より、さらに一階下の地下室に降りた。ドアは半開きになっていた。中から、蛍光灯の明かりと共に、ピチャピチャと何かを舐め取る音が漏れていた。隙間から中を覗き込んだ。

先ほどの男達が、全裸に剥かれ、コンクリートの床に

転がされていた。何人もの全裸の女達が、張り付き鋭い犬歯を突き立て、流れ出る鮮血を嚙っていた。ある女は、極度の貧血のために青白い顔色の若い男の股間に張り付き、傷を付けた男根を美味そうにしゃぶっていた。

男が、一瞬背筋を反り返らせ、「うっ」という呻き声をあげ、全身を弛緩させた。そのまま事切れたようだ。これまで、このような処刑は存在しなかったろう。男達は極限ともいえる快感の中であの世に旅立っていった。

大黒と近藤の二人は異様に高ぶっていた。女達の中に分け入り、美佐子と美由紀のところに行き、ズボンとパンツを下ろした。剥き出しとなった屹立した男根を、二人の血塗れの口に押し込んだ。すぐに熱い舌先で男根を舐られた。美佐子と美由紀は、大黒達の男根を吸いなが

らアヌスを指で犯した。

## 第五章 皆殺し

襲撃チームは、大黒、近藤、美佐子、美由紀それに真由美の五人であった。大黒と近藤がジーンズに黒の皮ジャンパーを着て、サングラスをかけていた。美佐子達女性群は、黒のTシャツと超ミニ薄皮のスカートという服装であった。一行はベンツに乗り込み、ビルを後にした。

鬼頭組の事務所は、地下鉄北二十四条駅の近くに位置していた。駅からは徒歩で十分程度の距離だ。北二十四条駅周辺は、ススキノと同じく、歓楽街である。ススキノの方が全国的には知名度が高いが、北二十四条駅周辺は、安さとサービスの質から地元出身者が通う場所であった。地元住民の運動で呼び込みと言われるものが皆無であり、ススキノと違ってぼったくられる心配も無い。

その歓楽街から、少し離れ、住宅街にさしかかった辺りに目的の事務所があった。大黒達一行が乗るベンツは、深夜の街を駆け抜け、三十分ほどで到着した。

事務所から三百メートルほど離れた地点に、ベンツを止め、後は徒歩で移動することにした。五人は道路を挟んで、有料駐車場に止めてあるワゴン車の影から、鉄筋三階建ての組事務所を見ていた。組員達はまだ起きているらしく、各階に明かりが灯っていた。深夜と言うこともあって、辺りに人影は無く、ひっそりと静まり返っていた。冬が目の前にきているせいか、骨にしみいるような寒さだった。

「こんな所で、チャカをぶっ放したら、おまわりさんが、すぐにやってくるんじゃないか？」

近藤が、大黒の皮ジャンパーからはみ出したイングラムM十の銃身を見ながら呟いた。吐く息が白い。

「こいつのことか？サイレンサー付きだから、銃声は押さえられる。一般人でそれを聞き分けられる奴はまずいないな。それにな。もう手は打ってあるんだ」

「何だ？」

「光二のマブダチに暴走族の幹部がいるんだ。そいつに午前三時になったら、この駅周辺で暴れるように指示させた」

「午前三時だと。もう二分過ぎたぜ」

近藤がオメガを覗き込んだ。

「お前の時計は進んでいるんだ。今、ジャスト三時だ：

…」

大黒の言葉が終わらぬうちに、けたたましいクラクシヨンの音が、深夜の住宅街を引き裂いた。

「時間のようね。先に行くわよ」

美佐子達女三人が、豊かな尻を悩ましげに振りながら事務所の方に歩いていった。正面のドアをノックした。

暫くして、ドアが開き、屈強な男達三人が飛び出してきた。美佐子達と何か会話をし、それから抱きかかえる様にして中に連れ込んだ。

「そろそろ行くぜ。近藤」

「OKだ」

二人、並んで事務所の方に、小走りに近付いた。武器は皮ジャンパーの下に隠したままだった。

金属製の頑丈なドアに鍵はかかっていたいなかった。それ



を開けると、一瞬白い光が視線に飛び込んできた。それは、美佐子達三人の糸も纏わない裸体であった。部屋には美佐子達と男達以外誰もいなかった。三人はそれぞれが、下半身のみを剥き出しにした男に、ソファの上で前から抱かれていた。腰を淫らに振りながら、男達の首筋に顔を押し付けていた。男達の顔は青ざめ、視線は宙を漂っていた。

「空っぽね」

美佐子が顔を上げた。口元から、真っ赤な血が滴り落ちていた。美佐子は絶命した男の死体から離れ立ち上がった。他の二人も役目を終え、満足げな表情で立ち上がった。女達の股間から、男達が放った精液が滴り落ちていた。

「今度は俺達が先だ」

大黒は、先に行こうとする美佐子を押しとどめ、階段を上った。近藤が、剥き身の刀身を右手に持ち後に続いた。二階の廊下を、武器を構えながら歩いた。外では、相変わらずクラクションが鳴り響いていた。

大黒が、廊下の突き当たりにある部屋のドアを、開け放った。中では男達三人がひとりの若い女を、犯していた。女は全裸にされ猿轡をはめられていた。テーブルの上に仰向けの姿勢で寝かされ、臍を舐められていた。女は美しい顔を歪め、目にいっぱい涙を溜めて、嗚咽を漏らしていた。床には女の衣服が散乱していた。大黒は注射器を女の腕に刺そうとしている男の顔面にイングラムの銃口を向け引き金を絞った。ダーという低い連射音

が響き、男の顔面がザクロのように粉碎し、大量の鮮血と脳漿が後ろの壁に飛び散った。近藤が一刀で、女の膣を舐めていた男の身体を、腹部で両断した。切断面から内臓が床にこぼれ落ちた。乳房を舐めていた男が、近くに置いてあったコルトガンメントを掴んだ。近藤の刃が一閃し、手首を吹き飛ばした。大黒が、男の頭をイングラムの銃弾で吹き飛ばした。二人は、膣を剥き出しにして、ソファの上で震えている女を見詰めていた。アヌスに差し込まれていたバイブレータのモータ音が、虚しい音を立てていた。

「どうする。大黒。この女は予定外だ」

「こいつらに拉致されたんだろいな」

モデルでも通用するような美しい女であった。二人の

視線は、サーモンピンクの臍肉に吸い寄せられていた。その時、真由美が現れて、女を抱き上げ優しく抱擁した。それから持って来た黒い皮袋に女を入れて肩に担ぎ上げた。

「どうするんだよ。真由美ちゃん？」

近藤が声をかけた。

「この娘も、被害者よ。連れて帰るわ」

「警察にたれ込まれたどうする？」

真由美はそれには答えず、ただ微笑むばかりであった。

真由美が、ドアを静かに開けた。他の部屋から、低い呻き声が聞こえて来た。大黒と、近藤の二人は、武器を構えながら、一つ目の部屋のドアを開けた。中から生臭い血臭がわきだしてきた。床には首や腹を、引き裂かれ絶

命した組員達が横たわっていた。床は大量の血液のために滑りやすくなっていた。美佐子や美由紀の姿は見えなかった。

隣の部屋では、美由紀が、全裸で床に横たわる若い女の臆に顔を押し付け、何かを囁っていた。女はまだ生きていた。微かに乳房が上下していた。女の寝ても崩れない豊満な乳房や首筋に、小さな穴があいており、そこから血が流れ出していた。二人のすぐ横には、でっぷりと太った中年の男が床に、うつ伏せに倒れていた。首が、百八十度後ろ向きになっており、天井を向いていた。両目を大きく見開き、ピクリとも動かなかった。大黒達の気配に気が付いたのか、美由紀が顔を上げた。口元から鮮血が滴り落ちていた。

「この女は、こいつの娼婦なのよ」

一言だけ話して再び、女の膺に顔を押し付けた。敵であれば、女でも容赦しないということか。大黒達は無言のまま部屋を後にした。

その隣の部屋は、ドアが開け放たれ、絨毯を敷き詰めた床では、美佐子が若い男を、仰向けに寝かせ、股間に顔を押し付けていた。男は目を閉じ、ピクリとも動かなかった。男の股間辺りから鮮血が流れ落ち、絨毯を真っ赤に染めていた。二人の近くには、萎びた男根の切れ端が転がっていた。

大黒は何も言わずに、そつとドアを閉めた。二階の敵

はすべて葬り去っていた。大黒達は、階段を使い三階に上がった。階段を上がったところで、組員の若い男と出会った。慌てて声を上げようとする男の顔面に、大黒が銃弾を浴びせた。男の顔面が、吹き飛び、脳漿と鮮血が飛び散った。銃声は付近を単車で走り回る暴走族の騒音で掻き消された。

「彰、どうしたんだ？」

近くの部屋から、中年で小太りの男が、酒臭い息を吐きながら出て来た。

男が、流した血液に、足を滑らせ転倒した。近藤が、中年男の口を足の底で押さえながら、顔色ひとつ変えず心臓を日本刀で刺し貫いた。男は白目を剥き、激しく痙攣し息絶えた。二人は、開け放たれたドアから、室内を

覗き込んだ。総勢十人ほどの組員達が、男根を剥き出しにして、三人の若い女達を取り囲んでいた。女達は三人とも、全裸に剥かれ、うち二人は床に四つん這いの姿勢をとらされていた。皆、容姿は申し分なく美しく、豊かな乳房と尻を持っていた。

二人とも目に涙をいっぱい溜め、嗚咽を漏らしていた。折檻を受けたのだろうか、口元から僅かに出血していた。二人の組員が、女達の背後に膝立ちとなって、尻の割れ目に顔を押し付けていた。若く美しい女のきれいなアヌスは脳が爛れるほどの強烈な快楽を与えてくれた。何度舐めても飽きることは無かった。

「ほらほら、もっとケツをあげるんだ！」

「兄貴。今日のスケは上玉ですね」



「ああ。高く売れるぜ。高木。女にシヤブを打て」

残るひとりは、仰向けに寝かされ、組員のひとりに首を絞められながら犯されていた。白目を剥いて、手足をばたつかせ苦しそうに息をしていた。窒息のためか、女の尻の下には、小水が広がっていた。近くには女達の引き裂かれた衣服が散乱していた。

「いいぞ、大内。強情な女は、殺してしまえ」

「こいつ、生意気な奴だが。締めりは最高だぜ」

「俺はケツを犯る」

首を絞めながら、女を犯していた男が、もうひとりの男のために結合したまま女を横向きに寝かせた。男が女の背後に横たわり、尻の割れ目に顔を付けて、音を立てて舐め始めた。十分に湿らせてからアヌスに、真珠を埋

め込んだ男根を一気に挿入した。

「嫌！」

女が背筋を大きく仰け反らせ、絶叫した。

「おお……締まる、締まる。大内、もっと絞めろや」

女は、口を大きく開け、必死に呼吸をしようとしていた。そのうちに白目を剥いて、舌をダランとさせ、動かなくなった。

「締まるぜ」

「痙攣してやがる」

「出すぞ。く……。いい……」

その時、近藤がむき出しの刀身を、上段に振りかざし、室内に乱入した。組員のひとりを頭部から切り裂いた。

剥き身の刃が一閃、二閃して、近くにいた組員の首を跳

ね飛ばした。慌てふためいて拳銃を抜いた組員の手を、刀身で跳ね飛ばし、眉間に突き入れた。血に染まった刀身が、後頭部から飛び出した。

大黒は、逃げ延びようと右往左往している組員を、イングラムで片端から射殺していった。泣き叫び土下座する組員も容赦はしなかった。素手で半裸の組員達は、屠殺される家畜のようであった。一瞬のうちに、室内で立っているものは、大黒と近藤の二人だけとなった。近藤は、鮮血や脳漿で汚れた床を歩き、仰向けに倒れて、動かない女に近付いた。床に膝を付き、女の乳房の下に耳を押し当てた。

「生きている」

そう呟いて、女の裸身に跨り、乳房の下あたりをマッ

サージし始めた。暫く続けた後、女の口を開け、息を吹き込んだ。

「うっ……」

と呻き声をあげ、女は息を吹き返した。

その様子を、美佐子達女三人が、戸口に立って見ている。美佐子が、壁にもたれて立っている大黒に、近付いた。

「大体かたついたようね。後は、組長と副組長だけね」

「副組長？」

「組長のひとり息子よ。組長より性質（タチ）が悪いわ」

「何で知っているんだ？」

「昔の知り合いよ」

美佐子はその件については、それ以上何も言おうとし

なかった。

「そいつらは何処にいるんだ？」

美佐子は、天井を指差した。

「あいつらは、屋上に家を建てて住んでいるのよ」

「それじゃ早くけりを付けるか」

近藤が、息を吹き返した女から離れ、血塗れの刀身を  
持って立ち上がった。

「美由紀に真由美。この娘達の面倒を見てて」

美佐子は、床に座り抱き合うようにして震えている女  
達を指差した。美佐子、大黒、近藤の三人が、部屋を出  
て屋上へと繋がる階段を上り始めた。階段を上ると、十  
畳ほどの踊り場についた。屋上へと通じる鋼鉄製のドア  
には鍵が掛けられていた。美佐子がノブを掴み、一気に

引き千切った。ドアがギーという音を立てて外側に開いた。そこは、空中庭園とも言える場所であった。周囲には広葉樹や針葉樹が生い茂り、中央には、水墨画を彷彿させる蓮の葉を浮かべた池が、水をたたえ、その辺に平屋建ての和風住居が建てられていた。

「龍司はいないようね」

そう言いながら邸内を伺う、美佐子の表情には落胆の色が浮き出ていた。

「組長は在宅のようね」

「ここからでもわかるのか？」

「趣味の悪いオーデコロンを使っていたから。もうひとりいるわ。若い女の匂いがする」

それを聞いていた大黒と近藤は、美佐子の顔をまじま

じと見詰めた。

「行くわよ」

鬼頭組の組長に、家族と呼べる者はいなかった。五十坪程の建坪の住居に、副組長をしている息子の龍司と、娼婦の亜矢の三人で住んでいた。組長の竜三と、娼婦の亜矢は、池に面した寝室で寝ていた。大黒、近藤、美佐子の三人が音も無く、濡れ縁から進入した。開き戸に鍵は掛けられていなかった。

近藤が、剥き身の日本刀を、突き出すようにして組長に近付いた。口を手で押さえながら、布団の上から胸を刺し貫いた。一瞬、竜三の背筋が反りあがり、すぐにピクリとも動かなくなつた。

美佐子は隣で寝ていた亜矢の布団を剥いだ。二十代前

半のはちきれそうな裸体が露になった。朦朧としている  
亜矢に猿轡をはめ手足を紐で縛った。男達の視線が、女  
のむっちりとした太腿に集中した。美佐子は着ている服  
を、すべて脱ぎ去り全裸となって、亜矢に覆い被さって  
いった。

「楽に死なせてあげるわね」

耳元で囁いた。



## 第六章 天国と地獄

第二へブンビルで寝起きを共にする大黒、近藤の二人の男達と、美佐子以下八十人の女達が、二台のバスに乗り、札幌の奥座敷と呼ばれる定山溪温泉に向かっていた。

十月の末ということであり、北海道ではすでに、紅葉の盛りを過ぎていた。それでも赤や黄色に色付く、木々は女達に嬌声を上げさせるのに、十分な魅力を持っていた。

時刻は夕暮れ時で、血のように赤い西日が木々の色を、いつそう鮮やかなものにしていた。

今日は、第二へブンビル主催の忘年会であった。店の経営は何とか軌道に乗っていた。女達は慣れない環境の

中でよく働いた。暴力団との闘争もあり、女達に疲労の色が見えていた。

そんなおりに、大黒と近藤が、この会を企画したのだ。定山溪温泉の中で、プール等の遊戯施設で有名なVホテルの新館に四十部屋を予約していた。

宿には十七時頃に到着する予定であった。宴会開始は十九時からであり、それまでの時間は各自、温泉に入り、プールで遊ぶなり自由時間となっていた。

大黒と近藤は、女達の間座り、缶ビールを飲みながら女達の浮かれた様子を楽しんでいた。車中はどちらを向いても、若く美しい女達の笑顔であふれ、鮮やかな花が咲いたようであった。若い女の体臭と香水の匂いが満ちていた。

ふたりにとって至福の時であった。二人は締めりの無い笑いを浮かべながら、今夜のことを思っていた。柔らかな女達の裸身の間で眠る夢を見ていた。

一時間ほどで、ホテルに到着した。大黒と美佐子、それに近藤と美由紀の夫婦組は、隣り合わせにツインの部屋を取っていた。部屋に入るなり大黒は、ベッドの上に美佐子を押し倒した。もどかしげに美佐子の上着とブラジャーを剥ぎ、豊満な乳房の合間に顔を埋めた。シヤネルの香りに交じり、微かに、若い女の体臭が感じられた。

「どうしたの？夜は長いのよ」

美佐子が、大黒の髪を触りながら子供に言い聞かせる

ように、諭すような口調で言った。

「バスの中で、盛り上がっちゃったんだ」

「若い娘達に囲まれてね」

美佐子は優しい微笑みを浮かべながら呟いた。

「尻を見せてくれ」

大黒の声は少し上ずっていた。

「しょうの無いボウヤね……」

美佐子は、そう呟きながらベッドの上で、スカートを

脱ぎ去り、パンティを焦らすような仕種で脱ぎ始めた。

豊かな腰の動きが艶めかしかった。大黒は我を忘れるか

のように、目の前の豊満な尻の合間に顔を、押し付けて

いった。

定期的に大波を発生させるプールや、落差の激しい滑り台がある変化に富んだプールでは、豊満な裸身をおざなり程度のビキニで隠した美女達が戯れていた。大黒と近藤は、眼下に豊平川の絶景を見下ろせる露天風呂で、密かに持ち込んだ缶ビールを飲んでいた。周囲には間接照明によって、鮮やかに色付いた木々が照らし出されていた。美佐子と美由紀は、仲間の女達とプールに行っていた。

「極楽だな。大黒」

近藤が、湯で顔を洗いながら言った。

「ああ。だが楽しみはこれからだ」

大黒は、零れ落ちそうな満点の星空に魅入っていた。

「宴会のことか？」

近藤が大黒の横顔を見詰めながら言った。

「色んな趣向を凝らしてある」

「どうせピンク系だろう？」

「当たり前だろうが。他に何があるんだ？」

「そうだな。それしか無いか」

「宴会が終わったら。地階のスナックにしけ込むか？さ

つき、ちよつと覗いたんだが、粒ぞろいだった」

「極上の美女達を置き去りにしてか？」

「皆、一緒にさ」

「そいつはいいな。店の女達が霞んじやうな」

午後七時、宴会場では、準備がすっかりと整っていた。大黒と近藤が最後であった。開き戸を開けると、会場から女達の嬌声が湧き上がった。ヴァンパイアの女達は、大黒達の注文もあつて、皆、浴衣に着替えていた。畳の上の宴会には、浴衣が定番だった。他の女達は、浴衣を着ている者やジーンズにTシャツ姿の者等、様々だった。

席はコの字型に設けられ、空いている方がステージ側となっていた。ステージ側の幹事席に、大黒と近藤が座った。妻である美佐子や美由紀は、離れた席についていた。夫婦でイチヤツクつくど場が白けるとの配慮であった。上席や末席という取り決めは行わなかった。幹事以外は自由な席に座った。テーブルには、新鮮な刺し身や

毛カニ、花咲カニ、タラバカニ、ホタテ、イクラ、ホッキ貝等が所狭と並んでいた。大黒が、頃合いを見て立ち上がった。

「それでは、これから、第二へブンビル主催の大忘年会を始めます。皆さん。座ったままでいいですから、グラスをお持ち下さい」

女達は、良く冷えたビールが満たされたグラスをかかげた。

「乾杯！」「乾杯！」「乾杯！」

「本日は、飲み放題。食べ放題となっております。追加注文は自由にどうぞ。後で余興も用意しておりますので、暫くの間、食事をお楽しみ下さい」

大黒は、役目を終え、席に着いた。



「お前。こういうことになるかと慣れてるな」

近藤が大黒のグラスに注ぎながら言った。

「一応サラリーマンだったからな。会社だと乾杯の前に、上役がくだらない戯言を長々と喋るが、それは無い」

「ふーん。俺には経験が無いな」

「それより。近藤。あれをしてみるよ」

「何だ？」

近藤は大黒が視線で示す方向を見詰めた。浴衣姿の京子が、長い足を前に投げ出して飲んでいた。

「ノーパンなんじゃないか」

大黒が生唾を飲み込んだ。

「そうだな。股の間から黒いものが見えたぞ」

近藤が合い槌を打った。

「他の女達もそうだぜ。それにブラジャーも無しだ」

二人は顔を見合わせ、ニンマリと笑みを浮かべた。

「極楽だな」

「ああ、天国だ」

「二人とも、何、ニヤついているの？」

「幹事だけで楽しんじゃって」

二人の背後では、麻雀仲間の真由美とアリサが覗き込んでいた。

「おう。真由美ちゃんにアリサちゃんか」

大黒が素っ頓狂な声で言った。

「まあ、まあ。二人とも立っていないで、座ったら」

二人は、テーブルの前に座った。

「二人ともご苦労さんでした」

真由美が隣の大黒にビールを注いだ。襟元から覗く胸の谷間に、視線が釘付けになった。何時の間にか、真由美の生足が大黒の股間を刺激していた。近藤も同じようにアリサにからかわれていた。

「ねえ。達也さんのチ\*ポ見たいな」

「何言ってるの。真由美ちゃん。まだ始まったばかりだよ」

「アリサも圭吾ちゃんのオチン\*ン見たい」

「皆に聞かれているよ」

近藤が言うように、近くに座っていた女達は、四人の会話に聞き入っていた。何時の間にか、周りを女達に囲まれていた。

「達也。見せてやったら。余興よ」

離れて座っていた美佐子がからかうような口調で言った。

「それではと。奥様のお許しが出たということだ」

隣に座っていた由香が、大黒の浴衣に手を差し入れた。

白魚のような指先が、男根に絡み付いた。

「何？達也さんたら。もうこんなに大きくなっているわよ。いやらしいわね」

「由香、自分だけで楽しまないで、見せて」

「勘弁してよ」

大黒が情けない声で言った。女達は皆、アルコールの助けもあって、大胆になっていた。ヴァンパイアの女達だけではなく、他の女達も期待に目を輝かせていた。二人とも、四十前の男には見えぬ若々しく、逞しい体つき

をしており、ルックスもまあまあだった。男二人に対して、女が八十人もいるのだ。由香が、大黒のパンツを抜き取り、浴衣の裾をたくし上げた。黒々とした男根が天を向いていた。

「まあ。ステキ！」

「生唾ものね」

「食べてみたいわ」

女達の嬌声が湧き上がった。

「駄目だ。アリサ。まずいよ」

隣ではアリサが近藤のパンツを脱がせていた。

「さあ。それでは余興を始めるはね。男達二人をステージに上げて！」

美佐子が立ち上がり、声高高と宣言した。素っ裸に剥

かれた大黒と近藤が、女達に抱えられるようにしてステージに上げられた。

「ゲームのルールは簡単よ。誰が最初に、男達をいかせるか競うの。手でも口でもあそこでも、何でもいいからいかせた者が勝ちよ。賞金は十万円。希望者は前に出て」

ほとんどの女達が立ち上がった。美佐子と美由紀は判定役として、参加はしなかった。八十人近い女達が、二班に分かれてジャンケンで順番を決めていた。勝ったものから順番を決めることができた。一番最初は、不利だが、それは後の方でも同じだった。

「大黒。これが余興なのか？」

「美佐子にやられた。アイデアを考えたのは俺だが……」

俺は見学を決め込むつもりだった」

「ひとり四十人の女に犯られるんだぞ」

「馬鹿。そんなにもつ訳ないだろう。誰かの口に出したら、ジ・エンドさ」

「呑気な奴だな。お前は……」

「なあ。近藤。ものは考え様だ。極上の美女様達に犯していただくんだぞ」

「どこまでも前向きな野郎だな……」

近藤が大黒のとぼけた顔を、穴があくほど見詰めた。

「それじゃ始めるはね。持ち時間はひとり、二十秒よ。

それから、言うのを忘れていたけど、男達がいく前に、あたったひとは罰ゲームとして、今度はいかされる側になるのよ」

「待って。いくらなんでも二十秒じゃ……。一番が絶対

的に不利よ」

「わかったわ。美由紀いいわね」

美佐子と美由紀は、ステージに上がって、床に座りこんでいる大黒と近藤の前に屈み込んだ。

「美佐子。本気なのか？」

大黒が、情けない声で尋ねた。

「余興よ。余興。後で私達ストリップでも何でも披露するわ」

美佐子は、大黒の男根を、手の平で四、五回擦り上げ、ぱくりと口に含んだ。舌先を絡み付かせ、激しく吸い始めた。白魚のような指先で睾丸をやさしく揉んでいた。

「達也さん。声出しているのよ」

「美佐子。張り切りすぎて。いかしちや駄目よ」



「美由紀。近藤ちゃんのアヌスに指入れて！」

順番を待つ女達が、囁し立てた。

「それじゃ。そろそろ始めましょうか」

美佐子が、大黒の男根から名残惜しそうに離れ、美由紀を促した。

「じゃ。裕子に彩。準備はいい？始め！」

美佐子の合図とともに、二人の女が、大黒達の男根に食らい付いた。

「痛いよ！」

「優しくしてくれよ」

二人の女は、焦りすぎて歯を立てていた。女達のあげる黄色い嬌声が続くなか、大黒と近藤は何か持ちこたえていた。早くいったからと言って、別に罰ゲームがあ

るわけではないが、お互い意地を張っていた。大黒は、冷酒を口に含んだ女にフェラチオされた時、危うくいきそうになった。ゲームも中盤にさしかかった頃、大黒の前に、全裸姿で股間に、張形を装着した真由美が現れた。

「達也さん。お尻を貸して」

「マジか？俺は、そんな趣味はないぜ」

「由香に珠美。達也を押さえていて」

「止めろ。離せ。美佐子助けてくれ！」

二人のヴァンパイアに手足を押さえつけられて、大黒は四つん這いの姿勢でもがいていた。真由美が大黒の堅い尻を押さえつけ、アヌスにクリームを塗り込んだ。

「前からこうやって男を犯してみたかったの。許してね。

達也さん」

「離せ！真由美ちゃん。いい娘だから止めてくれよ」

いつしか大黒の声は涙声になっていた。

「いくわよ。達也！」

真由美が大黒の黒い尻に跨がり、腰を押し付けた。

「ギュー！」

直腸を引き裂かれるような痛みにも、声をあげた。真由美は注送を繰り返しながら、右手で男根を激しく擦っていた。

「逝くのよ。達也！」

「……」

「ストップ。時間よ。真由美」

「ちえ。何でいかないのよ」

「どいて真由美。私の番よ」

アリサが真由美を押しのける様にしてどかせ、大黒を仰向けに寝かせてから、男根を喉の奥まで飲み込んで、激しく吸い始めた。

「いい……。逝くぞ！アリサ！」

大黒はアリサの髪を掴みながら、背筋を仰け反らせた。我慢に我慢を重ねた精液が迸り、アリサの喉に飛び散った。アリサは、音を立ててすべてを飲み込んだ。

「十万円ゲット！」

口元に精液をたたえたアリサが目を輝かせて立ち上がった。がった。

「真由美。あんたは罰ゲームよ」

その頃、看護師をしている美奈子の膾に、すべてをぶちまけた近藤が、天井を向いて荒い息をしていた。

「美奈子も十万円ゲットね。罰ゲームは、美保ね」

自由の身となった大黒と近藤が、幹事席にもどり、ビールを飲みながら、げっそりとした表情でステージ上を眺めていた。すでに第二ラウンドが始まっていた。今度の生け贄は、真由美に、大学生の美保だった。さっきまでの騒がしい雰囲気とはうって変わって、会場内は水うつたように静かになっていた。

同性愛の経験の無い美保が、駄々をこねていた。美佐子が美保を抱きしめるようにして、耳元で何やら囁いていた。

やっと決心したのか、美保は、床に仰向けに横たわった。美佐子がやさしく、浴衣を脱がせ全裸にした。むっちりとした太腿は閉じられたままだった。

一方、真由美は、落ち着いた様子で、浴衣を一気に脱ぎ捨てた。下着は身につけていなかった。抜群のプロポーションが露になった。

「真由美。お尻見せて！」

ステージ下で齧り付くようにして見ていた女達が騒いだ。真由美は、女達の近くに移動して、豊満な尻を向けて、四つん這いの姿勢となった。何本もの手が、真由美の絹のように滑らかな尻を、這い回った。興奮のあまり、ひとりの女が、真由美の尻に抱き付き、割れ目に舌を這わせた。他の女が、真由美の膣に指先を挿入して、かき回した。

「駄目よ。逝っちゃうじゃない」

そう言うと真由美は、女達の手を振り払い立ち上がった

た。美保の隣に、仰向けに横たわった。両足を開き、膝を曲げて、臆が見えやすい様にした。サーモンピンクのきれいな臆とアヌスが丸見えになった。女達の目から見ても、真由美の裸体は美しく劣情を抱かせた。

「じゃ。始めるけど。今度はちよつとルールを変えるわね。チーム対抗戦よ。四人がかりで、ひとりを罾るのよ。

持ち時間は一分。それじゃ、四人ずつペアを組んで！」

「準備はいい？いくわよ……。始め！」

美佐子の掛け声とともに、四人の美女達が、美保の裸身に群がった。美保は両手で顔を覆い隠すようにしていた。肩先が微かに震えていた。

「リラックスしてね。美保ちゃん」

「きれいよ。クリちゃんも可愛いわ。食べちゃいたいく

らる」

ひとりの女が、美保の太腿を押し広げ、臍に口を押し付けた。ピチャピチャといやらしい音が聞こえて来た。

豊かな両乳房も女達の口に含まれ、音を立てて吸われていた。顔を隠していた両手をどけられ、唇を奪われた。

柔らかに暖かい女の舌が絡み付いてきた。アヌスにも指を入れられていた。四人がかりの巧みな愛撫で、美保は我を忘れかかっていた。同性による、ソフトでの的を射た愛撫に溺れかけていた。何度もいきそうになっていた。眉間に皺を寄せて、必死に耐えていた。

「可愛いわよ。美保」

「……お願い。いかせて」

美保は次第に大胆になっていた。自ら四つん這いにな



り、尻を高くかかげた。

女達の指先が、膣とアヌスを同時に貫いた。

「いい……。いく。いっちゃう……」

真由美も、大きく足を広げられ、膣を舐められていた。

寝ても崩れない乳房を揉みしだかれていた。美保と違っ

て真由美は、最初から楽しもうとしていた。

唇を奪った女と、舌を絡ませるディープキスをしてい

た。

「真由美ったら。濡れ濡れよ」

膣を舐めていた女が、嬉しそうな声を出した。真由美

は、両足を大きく上げて、アヌスを舐めるように催促し

た。女が顔を押し付け激しい勢いで、アヌスを吸い始め

た。

美保は二チーム目で、四肢を突っ張らせ、絶頂を迎えていた。失神した美保を、ヴァンパイアの女達が抱え上げ、嬉しそうに歓談しながら別室に消えた。

真由美は、十チーム目まで持ちこたえていた。最終チームには、大黒も加わっていた。

「真由美ちゃん。さっきの札をさせてもらおうよ」

大黒は、そう言うなりごくりと生唾を飲み込んだ。真由美は、無言で大黒の前に、四つん這いの姿勢をとった。

大黒は泣きたくなるように美しい尻を、両手で割り、アヌに男根を押しあてた。アヌスは女達の愛撫により、十分に潤っていた。一気に男根を差し込んだ。

「ああ……。いい……」

真由美が背筋を仰け反らせ、喘ぎ声をあげた。大黒は

激しい勢いで腰を前後に振った。真由美のアヌスは、大黒の男根を激しく締め付けた。真由美が、喘ぎ声を上げながら、首を後ろに向け大黒の唇を食った。大黒の脳裏に、稲妻に似た衝撃が走りぬけた。アヌスが勢いよく収縮し、男根をさらに締めあげた。

「お……」

大黒は獣のような唸り声をあげて、真由美の直腸に精液を逆らせた。

同時に真由美も絶頂に達した。背筋を反り上げるようにして果てた。

大黒は、あまりの快感のために、意識が朦朧としていた。周りの女達が、余韻を楽しんでいる真由美と、男根を剥き出しにしたままの大黒を抱え上げ、別室へと運ん

で行った。残されたヴァンパイアの女達は、これとは思  
う女を追いかけ始めた。

「待ちなさいよ。麗子。お姉さんが可愛がってあげるわ」

「香織。おっぱい見せてよ」

「真由。食べちゃうわよ」

女達は嬉しそうな悲鳴を上げて、会場内を逃げ回った。

ひとりが捕まり、そしてまたひとりが捕まった。女達の

中には、我慢しきれずに、自ら全裸となり、ヴァンパイ

アの女に尻を突き出す者もいた。女は勝ち誇ったような

笑みを浮かべ、女のアヌスと膣に指を挿入し、激しい勢

いで出し入れした。女は、狂ったように喘ぎ声をあげな

がら、髪を振り乱し、豊かな尻を前後左右に打ち振るっ

た。

ある女は、前に屈み込んだヴァンパイアの顔を、臆に押しつけ、腰を上下に動かしていた。眉間に皺を寄せ、快感に悶える様は、扇情的であった。その淫らな様子に欲情したヴァンパイアが、背後から近付いていった。また、ある女は、逆さ吊にされ、前から臆を舐められていた。愛液が滴り落ちる美しい尻が、気持ちよさそうに動いていた。

ひとりのヴァンパイアは、二人の美女を肩に載せて、悠々と部屋を後にした。

ひとりで四人の女の手を引き、部屋を出ていく兵者（ツワモノ）もいた。

結局、女達全員が、ヴァンパイアに捕まり、それぞれの部屋に運ばれていった。

残されたのは、大量の酒瓶と、食い散らかされた料理の残りだけであった。

女達の部屋では、限りの無い女同士のSEXが繰り広げられていた。

ある部屋では、美佐子が、ベッドに寝かせた三人の女達を同時に、騎っていた。四人とも全裸姿となり、淫らな言葉を叫び続けていた。美佐子は、ベッドサイドに膝間付き、ひとりの女の膺を舐めながら、両側の女の股間を手で弄んでいた。

隣の部屋では、ひとりの女が三人のヴァンパイアに騎られていた。女は、床に置かれたバケツの上に、全裸で屈み込んでいた。三人のヴァンパイア達が周りに座り、その様子を食い入るように見詰めていた。女は、放尿す

るように強要されていた。尿道口が開き、最初はチヨロチヨロとそしてすぐに勢いよく、放尿した。放尿を終え、女はフラフラと立ちあがった。ひとりのヴァンパイアが手招きしていた。女は、憑かれたような表情で、近付いていった。女は、そのヴァンパイアの前に立ち、尿で濡れた臍を与えた。ヴァンパイアは、食らいつき美味そうに舐め始めた。周りで見っていた者達も、女に纏わり付き、舌や手で、尻や乳房を嬲り始めた。

土曜日の午前五時。大黒はひとり、厨房で女達の朝食の準備に余念が無かった。ヴァンパイアの女達は、朝が遅い。太陽が中天に差し掛かる頃に、欠伸（アクビ）をしながら現れるのが常であった。

貸マンションの入居者である女達は、意外と朝が早かった。女達の朝食を用意するのが、店のマスター兼用心棒である大黒のもうひとつの仕事であった。

サザンの鼻歌を唸りながらカブと油揚げの味噌汁を作っていた。その他のメニューは、塩鮭にベーコンとキヤベツの油炒め、それに卵焼きといった典型的な朝ごはん<sup>だ</sup>。手伝いの光二は、まだ来ていなかった。

「おはようございます」

「おはよう。美保ちゃん。朝が早いね」

大黒は、まな板の上に載せたカブを切りながら、ドアの方を見た。巨大に通う美保が、意味深な笑みを浮かべながら佇んでいた。美保は、今年二十歳になったばかりの、瑞々しい肢体を持った美女だ。白いTシャツにジ―



ンズを履いていた。襟元から覗く、Dカップの谷間に、思わず惹き込まれそうになった。最近では、大黒と、言葉を交わす機会が多くなっていた。

「今日のオカズは何？」

美保が自然な素振りで、食堂とカウンターで仕切られた厨房の中に入って来た。大黒の隣に立ち、片手で長い髪を押さえながら、味噌汁が入った鍋を覗いた。

「具はカブと油揚げ、味噌は赤味噌を使ってみた」

「いい匂いね。楽しみよ」

美保は耳元で囁くように言った。甘い吐息が耳元をくすぐった。美保は、カウンターの下に膝間付いて、大黒のジーンズを引き下げた。パンツの上から男根や睾丸をなぞる様に触った。さらにパンツを下げ、剥き出しにな

った男根を激しく手の平で擦り始めた。

「うっ……」

大黒が、ペーコンを切りながら呻き声をあげた。美保は、さらに大胆になっていた。黒々とした亀頭を舌の先で舐りながら睾丸を、手の平で揉んだ。

「おはようございます。兄貴。相変わらず早いっすね」  
寝ぼけ顔の光二が、カウンターから覗き込んだ。

「年寄りには朝が早いんだ。よく言うだろう？うっ……」  
美保が男根をぼくりと、喉の奥に飲み込んだ。

「どうしたんですか？なんか変だな。顔色悪いっすよ」  
「な、何でもない。こっちはいいから、テーブルを拭いてくれ」

上擦った声で言った。

その日の午後、大黒は、することもなく、近くにある中島公園をぶらついていた。携帯が鳴った。美佐子から部屋に戻るようにとのメールが入っていた。

部屋は、昼間だというのにカーテンが閉め切られていた。美佐子は、ダイニングキッチンにいた。食卓テーブルの椅子に全裸で腰掛けていた。テーブルの上には、全裸の女が横たわっていた。女は、今朝、抱いたばかりの美保だった。美保は、安らかな吐息を立て、眠っていた。若くはちきれそうな瑞々しい裸身が、テーブルに載せられている様子は、極上のステーキを連想させた。

「どうしたんだ？」

大黒が上擦った声で聞いた。

「食事の時間なの」

「食事？」

「そろそろ補給の時期なのよ」

「今までは、俺に見せなかったな」

「だって。見たいとは言わなかったわ」

「それはそうだが……」

「今朝、美保を抱いたでしょう？」

「……」

「いいのよ。隠さなくたって。私だって、仕事柄、毎日のように他の男に抱かれているから……。気にしなくて

いいのよ」

「知っていたのか？」

それには答えず、美佐子は意味深な笑みを浮かべ、美

保の太腿を押し広げた。

きれいなサーモピンク色の臍が見えた。美佐子は、人差し指を、臍口の下の部位に押し当てた。

「ここはね。血管が通っているから血の流れがいいのよ。それに傷が目立たないし」

そう言いながら、指先を軽く動かした。皮膚が切れ、血が零れ落ちた。美佐子は股間に食らい付き、流れ落ちる血を舌で舐めた。指先が美保のアヌスに入れられている。大黒は、美佐子が美保に危害を加えるつもりが無いことはわかっていた。命に別状が無い程度の血液を、奪うだけだ。美佐子は、椅子から立ちあがり、前屈みになって美保の血を吸い続けた。目の前で、美佐子の美しい尻が妖しく動いていた。

大黒は、高ぶっていた。極上の美女同士が、不思議な

絡みを続けていた。大黒は、ズボンとパンツを脱ぎ捨て、美佐子の尻を抱きしめた。十分に潤った膣に挿入し腰を使い始めた。

大黒と近藤そして、真由美の三人は、石狩湾新港から沖へ十キロの海域で、小型クルーザに乗り、鬼頭組の組員の死体を海に沈めていた。一ヶ月前に、店で暴れた組員の死体を五人一まとめにして、簡易プール用の厚いビニール袋に包み、鎖でがんじがらめに縛り付け、さらに重しを付けて暗く冷たい北方の海に沈めたのであった。死体は、ヘブンビル地下の冷凍庫に入れておいたので、腐敗はしていなかった。運び役は、真由美が、運転手を

近藤が、見張り役を大黒が務めていた。

「これじゃ。B級映画に出てくる三下ヤクザと同じだな」

大黒が、海面に浮かぶ、無数の気泡を眺めながら呟いた。

「俺達、どこまで落ちていくんだ」

隣で見っていた近藤が深い溜息をついた。

「まったくくよね。この寒空に。暖かいベッドが恋しいわ」

寒空と言う割には、生足に超ミニスカートを履いた真

由美が、独り言のように言った。

「そうだよね。真由美ちゃん。その格好じゃ寒いだろう。

おじさんが暖めてやろうか？」

「厭ね。中年オヤジは。駄目よ。そんなところ、触つち

や！」

大黒と近藤は、真由美を前後から抱きしめ、パンティに入れた手を忙しそうに動かしていた。

大黒達のクルーザが港に着いた時、年期の入った中型貨物船が湾内に進入してきた。真夜中というのに、明かりを点けていなかった。その時、周辺で飼われている番犬が一斉に遠吠えを始めた。

「何だか。嫌な予感がするの」

真由美が、二人の手を握り締めた。魅力的な太腿に鳥肌が立っていた。

「どうしたの？」

「胸騒ぎがするのよ」

「あれのせいかな？」

近藤の視線の先には、先ほどの貨物船が着岸し、荷物



を降ろしているのが見えた。巨大なコンテナがひとつつ降ろされていた。大黒達のクルーザは、貨物船の隣に着岸した。サンタマリア号という船名が、目に入った。

「早く帰りましょう」

大黒と近藤は、真由美を両側から抱える様にして、港に泊めておいたベントツを目指した。ベントツまで後、三十メートルのところまで、一行は異様な気配に棒立ちとなった。月齢十五日の満月が作り出す彼らの影を巨大なひとつの影が呑み込んだ。三人は、ごくりと生唾を飲み込み、ゆっくりと振り返った。

「うっ……」

目の前に、身長三メートル以上はある白人の大男が佇んでいた。

「女を置いていけ」

大男は流暢な日本語で話しかけてきた。

「真由美をどうするつもりだ？」

大黒がやっとの思いで、言葉を返した。

「食うんだ」

真由美の身体が小刻みに震え始めた。瞳が真紅に爛々と燃え上がり、大男を睨み付けた。

「薄汚い食人鬼野郎が！」

真由美は絶叫し、二人を突き放した。二人は衝撃で地面に転がった。真由美は、脱兎のごとく大男に突進した。

重い衝撃音がして、ふたりはぶつかりあった。ヴァンパイアの渾身をこめた体当たりを、まともに食らって大男は涼しい顔をしていた。真由美の襟首を掴み上げ、コン

クリート製の地面に二度、三度と叩き付けた。その勢いで、高く空中に投げ上げた。二十メートルの高みから落下して来た真由美の腹部に、横蹴りを叩き込んだ。真由美の身体は、弾丸のように弾け飛び、近くの倉庫の壁に激突した。コンクリート製の壁が粉碎し、破片が爆風のように飛び散った。瓦礫の間で、真由美は少しの間、動くことができなかった。大男は、涼しそうな顔をしてその様子を眺めていた。真由美はふらふらと立ち上がった。ヴァンパイア化してから、このような屈辱を味わったことは無かった。

「この野郎！」

絶叫し、二度、大男に接近した。待っていたかのように、大男は巨大な手刀を、真由美のコメカミに打ち下ろ

した。真由美は「うっ」という呻き声をあげ、うつ伏せの姿勢で地面に倒れ込んでそのまま動かなくなった。

大男は片手で首を掴み、宙吊にした真由美の衣服を紙のように引き裂いた。

パンティ以外の衣服の断片が、周りに四散した。ぐつたりとした真由美を小脇に抱え、パンティを剥ぎ取り豊かな尻を剥き出しにした。手の平を尻に叩き付けた。見る見るうちに赤く腫れ上がった。

「お転婆娘には、これが一番だ」

大男は独り言を言いながら、叩き続けた。赤く腫れ上がった尻の膨らみを美味そうにしゃぶり始めた。凶太く長い舌を、丸め筒状にして、アヌスに突き入れた。大男は失神した真由美を地面に、仰向けに横たえ、太腿を押

し広げ、剥き出しになった臆を、ジュルジュルと音を立てて吸った。

「美味しい。日本娘の味は最高だ！生でもいけそうだ」

大男は、歓喜の声を上げた。十分に臆の味を堪能してから、ズボンを膝まで下ろし、ビール瓶ほどもある太さの巨大な男根を、さらけ出した。真由美の太腿を極限まで押し広げ、男根を挿入し始めた。

「止めて！達也さん。助けて！」

真由美は激痛のために息をふきかえしていた。背筋を反り返し、頭を前後左右に打ち振るった。メリメリという音がして、臆が裂け、鮮血が迸った。大男はかまわず、腰を激しい勢いで前後させた。二度失神した真由美を、うつ伏せにして、今度はアヌスに突き入れた。真由美の

首を軽く絞めながら、根元までの挿入を繰り返した。最後には大量の精液を直腸にぶちまけた。大男は失神した真由美を肩に担ぎ上げ、その場を去ろうとした。

「パーン、パーン」という乾いた銃声が出て、大男の後頭部から血しぶきがあがった。

「真由美を降ろせ。ウドの大木野郎が！」

大黒がベレッタM九三Rをかまえ、佇んでいた。近藤がベントツの方によるめきながら歩いていった。真由美によって突き飛ばされた衝撃のためにふたりは軽い脳震盪を起こしていた。

「お前死にたいのか？それに俺はウドの大木という名ではない。サムソン様と呼びやがれ。この下衆野郎が」

大男は、ゆっくりと振り返った。後頭部を撃たれ平然

としていた。

「ダダダ」今度は、三点バーストモードで、大男の顔面に九ミリパラグラム弾をばら撒いた。血しぶきがあたり、目や鼻を吹き飛ばした。

「うっ……」と呻き声をあげ、真由美を地面に落とした。

大黒は、顔を両手で押さえ佇む大男の胸部に、銃弾を撃ち込んだ。一瞬で二十連装のマガジンが空になった。マガジンを交換しようとしたその時、大男が、顔を覆っていた手をどけた。破壊された筈の顔が、元に戻っていた。

「あんまり調子に乗るなよ。チビ野郎」

その声を聞いて、大黒は小便をちびりそうになった。

「大黒。これを使え！」

近藤が、ベンツのダッシュボードに入れておいたレイジングブル四五四カスールを、大黒に放り投げた。破壊力の点では、四七五ラインバーには劣るが実用的には世界最強のリボルバー拳銃であった。大黒は、回転しながら宙を舞うレイジングブルに飛びつき、サムソンと名乗る大男の顔面に四五四カスール弾を全弾叩き込んだ。サムソンは、両手で顔を押さえ、地面に両膝を突いた。

「ずらかるぞ。大黒！」

近藤が、失神した真由美を背負い、ベンツの方に駆けていくのが見えた。大黒がそれに続いた。

「近藤。早くエンジンをかけろ！奴は生きている」

「うるさい！今。やっているところだ」

大黒は、後部座席でぐったりとした真由美を抱きかか



え、リヤウインドウからサムソンの様子を見続けていた。サムソンがゆっくりと立ち上がった。案の定、顔にできた筈の傷は消えて無くなっていた。容貌が変わり始めた。瞳が赤く燃え上がり、口が耳元まで裂け、鋭い牙が生えていた。恐怖映画に出てくる悪鬼の再現だった。

「近藤。早くしろ！」

その時、エンジンが始動して、ガクンといった感じで走り出した。

「近藤。奴はデカイ拳銃を持っているぞ！」

サムソンは、懐から抜いた巨大なリボルバーで、ベンツに向けて狙いを定めた。

「大丈夫だ。この車は防弾仕様だ。象撃ち用の四六〇ウエザビーマグナムの直撃を受けても……」

近藤の講釈が終わらぬうちに、ガツンという衝撃がしてリヤバンパーが宙に吹き飛んだ。

「四六〇、四六〇……」

蒼白な顔で、呪文のように唱え続け運転する近藤を尻目に大黒は、レイジングブルに弾を込めていた。レイジングブルを右手にベレッタM九三Rを左手に持ち、後ろを振り向いた。

サムソンの姿は見えなかった。突然、大黒側のウインドウガラスが四散して、巨大な手が突き込まれた。サムソンが不敵な笑いを浮かべ、ベンツに並び疾走していた。その時ベンツは時速八十キロを出していた。首を絞めようとするサムソンの手に、四五四カスール弾をぶち込んだ。さっと手が引かれた。大黒は、忌々しそうな目付き

で車内を覗き込むサムソンの顔に、二丁の拳銃を擬した。二丁が火を噴き、一瞬で弾装が空になった。サムソンの姿が掻き消えた。

ベントは深夜の倉庫街をひた走った。時速百五十キロは出ていた。

突然、近藤が「何だ。ありゃ！」という素っ頓狂な声を出して急ブレーキをかけた。前方にサムソンが立ちはだかり巨大なリボルバーをかまえていた。

バンツは横滑りをしながら、サムソンに突っ込んだ。ドーンという衝撃音とともにサムソンを跳ね飛ばした。

サムソンの身体は宙を飛び倉庫に激突した。爆音にも似た衝撃音がして、鉄筋コンクリート立て倉庫が倒壊した。

「殺ったのか？」

大黒が声を張り上げた。

「わからない。確認しに行くのは御免だ」

近藤が、空ろな視線で、バックミラーを覗いていた。

「ヤバイぞ。近藤！真由美が……、真由美が死にそうだ」

「馬鹿野郎。ヴァンパイアがそう簡単に死ぬものか」

「凄い熱があるんだ。お前医者だろう。何とかしないか」

「俺は、産科専門だ……」

大黒は、目を閉じ震え続ける真由美の裸身を、抱きし

めていた。

「真由美、俺の声が聞こえるか？しっかりしろ、真由

美！」

真由美は目を覚まさなかった。

「近藤！どうすりゃいいんだ」

「どうすりゃいいたって。ヴァンパイアには血しかない  
だろう……」

近藤がそう言うなり、大黒が懐を探り始めた。近藤は  
バックミラーでその様子を見ていた。大黒は、バタフラ  
イナイフの刃を、自分の手の平に押し当てた。

「や、止めろ！」

近藤の制止も聞かず、大黒は刃を走らせた。鮮血が零  
れ落ちる手の平を、真由美の口に押し付けた。鮮血が、  
口内に注ぎ込まれた。その時、真由美の目がぱっと見開  
かれた。瞳は血のように赤くなっていた。大黒の手を、  
片手で掴み激しく吸い始めた。大黒は、血を吸われなが  
らこれまでに無い、高ぶりを感じていた。

真由美のもう一方の手が、大黒のズボンに差し込まれ

た。絹のように滑らかな指が屹立した男根を激しく擦り始めた。大黒は、何度も達していた。真由美の手の平に、精液を放ち続けた。

## 第七章 拉致

土曜日、午後二時、大黒は目覚めた。白いレースのカーテンを通して、降り注ぐ日の光に目をしばたかさせた。激しい喉の渇きを覚えていた。いったいどれくらい眠っていたのだろうか。傍らには点滴の台が置かれ、手首からはチューブが伸びていた。部屋の作りには見覚えがあった。自分と美佐子の寝室だ。起き上がろうとしたが、全身に力が入らなかった。

「美佐子。いるのか？」

大黒の呼び声に呼応するかのようになり、ドアが開いた。何時の間にか美佐子がベッドの側に立っていた。

「気が付いたのね。達也」

「ああ、何とかね」

「三日間も眠り続けていたのよ」

「……そうだ。真由美は無事なのか？」

「心配しなくてもいいのよ。彼女なら翌日には回復していたわ。全身の骨が折れていたの。それに内臓破裂でショック状態だったわ。貴方のお陰で助かったのよ。さっきまで見舞いに来ていたわ」

「ヴァンパイアでも死にかけるんだ」

「あたり前よ。再生不可能な怪我を負えば助からないわ」

「そうなんだ。うっ……」

大黒は手の平に、鋭い痛みを感じた。

「痛むの？……ねえ。達也これからは無理しないで。真

由美の件はお礼の言いようも無いけど……。もう少しで

死ぬところだったのよ」



「わかったよ」

「それから、貴方達を襲った相手なんだけど……」

美佐子が指先で小首をかかげた。

「あのオーグル野郎のことか？」

「オーガとも言うわね。それが、私達が知っているのは違うのよ。奴らは、力は強いけど鈍重で知能も低いので」

それに私達種族には逆らわない筈なんだけど」

「奴は八十キロで走るベンツに追いつがってきたから

な」

「今、ヨーロッパとアメリカにいる知人達に照会してい

るところよ」

「そうか……」

「そうだ。お腹空かない？」

「そう言えば、そうだな」

「お粥か何か作ろうか？」

「……リンゴが食べたい。摩り下ろしたリンゴがいいな」

「摩り下ろした……わかったわ。ちょっと待っていて」

美佐子は部屋を出て行き、十分ほどで戻って来た。ベツドに腰掛け、大黒を抱き起こした。背中から抱き抱える様にして、持って来たおろしリンゴをスプーンで食べさせた。

「美味しい？」

「ああ……。美味しい。懐かしい味がするよ」

「もっと食べる？」

「ありがとう。でももういいよ。少し眠くなってきた。

なあ、美佐子……」

「何……」

「もうひとつお願いがあるんだけど……」

大黒は、もじもじしながら言った。

「何よ……」

「その……。あのな。おっぱい吸わせてくれないか」

「馬鹿。達也ちゃんは、赤ちゃんでちゅね」

美佐子はそう言いながら、シャツを脱ぎブラジャーを外した。形のいい豊かな乳房が零れ落ちた。大黒は目の前のご馳走に食らい付いた。きれいな乳首を、音を立てて吸った。

「……うつ。いいわ……。ステキよ。達也」

美佐子は目を閉じ、快感に身を任せていた。何時の間にか大黒は、美佐子の乳房に顔を埋め寝息を板立てしてい

た。美佐子が大黒の寝顔をじっと見詰めた。胸がキュンと熱くなった。激しい恋が愛へと変わりつつあった。ヴァンパイアの愛は切ない。ヴァンパイアは年を取らないが人は確実に老いていく。何時かは別れなければならぬ宿命であった。美佐子は、大黒の頭を抱いて目を閉じた。すぐに安らかな寝息を立て始めた。眦（マナジリ）に一粒の涙が光っていた。

「トントン」というドアをノックする音が聞こえた。ドアが開き、超ミニスカートを履いた太腿丸出しの真由美が現れた。

「達也さん。元気してる？」

「真由美ちゃんが来るのを、首を長くして待っていたん

だ」

「相変わらずうまいのね。そうだ。美味しいワイン持って来たわ」

「そいつは有り難い。ここんところ禁酒だったからな」

「コルク抜きは何処？」

「サイドボードの下の引き出しに入っている」

真由美は頷き、背中を向けて、腰を屈めた。真由美はノーパンだった。形のいい豊かな尻が丸見えとなった。

「いい眺めだ。サービスのつもりか？」

「そうよ。助けてくれたお礼。気に入った？」

「ああ。最高だぜ」

「もつとサービスしてあげようか？」

真由美は淫らな笑みを浮かべながら、ベッドに上がり、

大黒の顔に跨り、臆を押し付けた。大黒は鼻先を押し付け、いっぱい息を吸い込んだ。シャワーでも浴びて来たのか、石鹸のいい香りがした。真由美は腰を前後に振り、臆を擦り付けるようにした。さらに上体を後ろに傾けて、アヌスを与えた。大黒は貪るように、口を動かした。舌先をアヌスに挿入した。

「ああ……。いい……。真由美のおしり食べて」

それから一週間後、リハビリ中の大黒に、近藤から連絡が入った。マンションに入居しているOLの彩と、学生の美香が行方不明であるとのことだった。

二人は、三日前からマンションには戻らず、友人にも

何も事付けが無いとのことだった。

そこは、札幌近郊に位置する石狩湾新港内の一角であり、かつては、土木建材を生産する工場の跡地であった。広大な敷地を有し、何棟もの倉庫が建てられていた。今は閉鎖している筈の事務所に明かりが点いていた。

鉄筋二階建ての事務所の前には、黒塗りのBMWと、大型トラックが駐車していた。カンテラの暗い明かりによって照らし出された事務所内にある応接コーナーで、ひとりの男とひとりの女が、向き合っていた。二人の側には、ポータブルのストーブが置かれていた。

男は鬼頭組の残党である元副組長 鬼頭龍司、女はマ

リアであった。龍司は痩せて長身の身体をダークスーツに包み、マリアはいつもの戦闘服姿ではなく、太腿丸出しの超ミニスカートに牛皮のコートを羽織っていた。

「久しぶりね。龍司。元気だったの？」

「元気な訳、ねえだろう。オヤジはぶち殺され、組は消滅したんだ」

「それは、それは、大変だったわね」

マリアは長い足を組み替えながら、言った。龍司の暗く空ろな視線が、マリアのスカートの中を、一瞬覗き込んだ。

「望みのものは用意してきたぜ。何とかしてくれるんだろうな？」

「見せてちょうだい」



マリアは目を輝かせ、身を乗り出した。龍司は洋服の隙間から覗く、胸の谷間を、じっと見詰め溜息をついた。

それから背後に向けて命令した。

「木村。ブツを持ってこい！」

奥から、見るからに酷薄そうな容貌をした中年男が、ジュラルミンのケースを重そうに引き摺って来た。ケースを応接テーブルに載せ、蓋を開けた。中には一万円の札束がぎっしりと詰まっていた。

「三億ある。これ以上は出せない」

「これだけなの？」

不満気な顔で言った。

「わかったよ。木村！オマ＊コ連れてこいや」

「龍司ったら。焦らさないでよ」

木村が、部屋を出て行き、台車に差し渡し一メートルほどの木箱を載せて運んできた。それを龍司と木村の二人がかりで床に降ろした。木村が木箱の蓋をあけた。中から、香水の匂いと、微かに若い女の体臭が広がった。

マリアが身体を乗り出す様にして、木箱の中を覗きこんだ。中には、誘拐された彩と美香が、全裸で折り重なるように入れて入れられていた。ふたりとも、狭い箱の中で海老反りの姿勢をとらされ、薬でも嗅がされたのか、安らかな寝息を立てていた。

「出して。テーブルに載せて。ひとりはうつ伏せに、もうひとりは仰向けに並べるのよ」

木村がひとりずつ女達を、マリアの指示どおりテーブルに並べた。マリアは、宝石を眺めるかのようにうっと

りとした表情で、二人の豊かな乳房や尻を見詰めた。特に美香の尻は絶品だった。沁みひとつないすべすべの肌をした尻は、泣きたくなるほどに美しく淫らであった。

「気に入ったわ」

彩の乳房と、美香の尻を、両手で揉みながら言った。

「女ならまだまだ手に入る。八十人はいるからな」

「本当でしょうね？」

「ああ。約束する。たたし、美佐子という女と連れ合いの大黒だけは渡して欲しいんだが……」

「美佐子って美人？」

「ああ、飛び切りのな」

「考えておくわ。八十人か……。でもそんなに食べきれ

るかな」

独り言のように言いながら、マリアは、仰向けにした彩の太腿を押し広げた。陰毛は注文どおりに剃られていた。きれいなサーモンピンクの臍が露になった。

「うん……。いい匂い。堪らないわね」

淫らな笑みを浮かべながら、股間に顔を埋めた。包皮に舌を絡め、クリトリスを剥き出しにしてしゃぶり始めた。暫くそれを続け、今度はうつ伏せに寝かせた美香の豊かな尻を抱きかかえるようにした。尻の膨らみを、舐めまわした。それから合間に、顔を入れ舌でアヌスを舐り始めた。ピチャピチャという厭らしい音が聞こえてきた。

美香を騷り続けるマリアの尻が目の前で揺れていた。龍司は堪らず、マリアのパンティを降ろし、顔を合間に押し付けるようにした。マリアは逆らわなかった。逆に

催促するように尻を上下に動かした。龍司はマリアの潤みきった秘部を、音を立てて吸い始めた。

「合格よ。望みを叶えてあげるわ」

テーブルに座ったマリアが、臆を口で愛撫する龍司の頭を、上から見下ろしながら言った。

「そんなに良かったのか？」

龍司はマリアの愛液で濡れた顔を上げた。

「まあね。そうだチェックをするのを忘れていたわ。お腹の中まできれいにしてくれたわよね？」

「ああ。ヒイヒイ泣きやがる女に、何発も浣腸してやつたぜ」

「一応確認するわね。女達を四つん這いにさせて」

龍司と木村は、失神から覚めない彩の裸身を、左右か

ら支えるようにして、四つん這いにさせた。マリアが彩の尻の前に座り、右手に薄いスキン製の手袋を付けた。その手を可憐なアヌスにめり込ませて行った。

「うん。凄い。締め付けるわね」

マリアの右手は、手首まで中に入っていた。直腸の襞を指先で搔き回した。

暫く感触を楽しむように、右手を動かしたあと、一気に引きぬいた。手に汚物は付いていなかった。美香にも同様なチェックを行った。

「女達を車に運んで」

マリアと龍司は恋人同士のように肩を抱き合いながら、事務所の前に横付けされた大型トラックに近付いた。

木村が、木箱を載せた台車を押しながら続いた。その時、

ガツンという鈍い音がしてトラックが左右に揺れた。荷台の扉が開き、中から戦闘服に身を包んだ白人の女が、飛び出してきた。

「サムソンが禁断症状を起こしているのよ。急いでマリ  
ア！」

それを聞いたマリアは、木箱の蓋を開け眠り続ける彩を肩に担ぎ、荷台の入り口に飛び込んだ。サムソンの部屋から、壁を叩く鈍い音が響いていた。

「サムソン！ 入るわよ」

マリアは肩に、彩を担いだまま、部屋に飛び込んだ。サムソンが部屋の片隅で巨体を丸くし、頭を抱え震えていた。

「女だ……。尻肉を食わせろ……」

重低音の声が室内に響いた。

「連れて来たわよ！」

マリアは叫ぶように言い、彩の裸体をテーブルの上に横たえた。サムソンが顔を上げ、憑かれたような表情で、

彩の盛り上がった尻をじっと見詰めた。

すぐに大量の唾液が、零れ落ちた。

「肉だ……。女の柔肉だ……」

サムソンは夢遊病者のように立ち上がり、眠り続ける彩に近付いた。尻を持ち上げ、顔を押し付けた。ジュルジュルという音を立ててアヌスを吸い始めた。

異様な気配に、彩が目を覚ました。ぼんやりとした表情で周囲を眺め、そして自分の下半身を押さえている巨大な手を見詰めた。ゆっくりと顔を背後に向けた。見た



こと無い巨大な頭が、自分の尻を舐めていた。サムソンがゆっくりと顔を上げた。サムソンの顔が急激に変わりはじめていた。両目が血のように真っ赤に輝き、巨大な犬歯が、によつきりと生え、口が耳元まで裂けた。

「ギャー！」

彩は絶叫し、四肢をばたつかせた。サムソンが彩の裸身を仰向けにして、臍に顔を押し付けた。恐怖のあまり彩は失禁した。小水のシャワーがサムソンの顔に降り注がれた。サムソンは大きな口を開け、小水を飲み込んだ。マリアは、壁に張りつくようにしてその様子を眺めていた。股間を剥き出しにして手で自らを慰めていた。若く美しい女が、悪鬼によって犯され、生きたまま食われようとしていた。サムソンの巨大な男根が、彩の臍にあて

がわれた。

「ギャー！」

彩が白目を剥いて失神した。メキメキと骨が軋む音がして、大きく膨らんだ膣が何とか巨根を呑み込んで行った。サムソンが激しく腰を使い始めた。バキバキと彩の腰骨が折れる音がした。二、三分でサムソンは絶頂に達した。大量の白濁した精液が膣から流れ落ちた。マリアがフラフラと近付き、男根の先端を舐め始めた。

「どうした。マリア？お前も食べて欲しいのか？」

サムソンがマリアの頭を見下ろしながら、地響きのような声で言った。

「この女のクリトリスを食べたいの。いいでしょう？」

「好きにしろ。その他は俺が全部食うからな」

マリアは、失神から覚めない彩の股間に顔を近付けた。包皮を捲りあげクリトリスを剥き出しにして、膣から零れ落ちる精液を、指先で塗り込んだ。

クリトリスを口に含み、舌先で舐めまわした。それを前歯の間に挟み、一気に噛み切った。

「うっ……」

激痛のためか彩が目を覚ました。股間に激痛を感じていた。自分の股間に白人の女が張り付いているのが見えた。そして、重苦しい威圧感を感じ、顔を上げた。先ほどの巨人が悪鬼のような顔で、彩を見下ろしていた。

「キヤー。た…助け…て。誰か！」

サムソンが髪を振り乱し泣き叫ぶ彩を持ち上げ、テーブルにうつ伏せに寝かせた。太腿を両手で押さえ、染み

一つない豊かな美尻に顔を近付けていった。

口が耳元まで裂け、鋭い乱杭菌の合間から大量の唾液が零れ落ち彩の尻に降り注いだ。柔らかな尻の膨らみに乱杭菌が食い込んだ。ガブリという音がして、肉塊を食いちぎり、美味そうに咀嚼し呑み込んだ。

「ギャー！」

彩の断末魔とも思える絶叫が湧き上がった。サムソンは尻をあらかた食べ尽くし、今度は仰向けにして、膣肉に食らいついた。一噛みで大半の肉を食い千切り頬張った。乳房もガブリと食い千切り胃袋に収めた。マリアが足音を忍ばせ、部屋を後にした。サムソンは彩の死体を解体するのに夢中で、それに気が付かなかった。マリアは、隣の部屋のドアを開けた。室内では、美香に五人の

女達が絡み付いていた。皆、一糸も纏わぬ全裸姿で、手足が長く美しいプロポーションを持っていた。美香は失神から覚めており、両手で顔を覆い隠し、さめざめとした嗚咽を漏らしていた。女達は手や口を使って美香の裸身を翻弄していた。

「お楽しみのようなね。私も入れてよ」

マリアはそう言いながら、着ていた衣服をすべて脱ぎ去った。

「終わったら皆で、食事の下ごしらえをするわよ。ヤクザ達がステキなキッチンを用意してくれたからね」

マリアは、図太い張形を装着して、美香の裸身に覆い被さって行った。他の女達は、乳房を舐め、唇を奪い吸い出した舌を思う存分に舐めた。美香はマリアに犯され

ながら、暗い欲情を感じ始めていた。目覚めてから、女達によって犯されながら、食べてやると口々に言われた。最後には、生きたまま調理してやるとも言われていた。

美香は以前から、美しい女達に犯され、その果てに生きたまま食い殺される妄想を抱くことがあった。女達が本当のことを言っているとは思えなかったが、言葉による蹴りが、欲情に火をつけた。マリアの腰の動きが激しくなった。膣内を激しい勢いで掻き回していた。痺れるような快感が湧きあがった。美香は、鋭い喘ぎ声をあげながら、マリアの背中に爪を立てた。

今は機械類が撤去された工場内の一角に、巨大なシン

クやガスレンジ等の調理器具が置かれていた。コンクリート剥き出しの床には、縦一・五メートル幅五十センチのコンロが置かれていた。中には、赤々と燃える炭がくべられていた。その近くでは、全裸姿の美香がテーブルの上に、四つん這いの姿勢をとらされていた。周りには、先ほどの女達が、手に持った刷毛でオリーブオイルを、美香の全身に塗りたくっていた。乳房や尻等の重要な部分は、特に念入りに塗り込んだ。ひとりには、オリーブオイルを塗った指先を、アヌスに挿入し中を掻き回していた。オリーブオイルの後には、塩とコショウを全身に振り掛けた。

マリアは、微塵切りにして味付けをした野菜を、美香の臍に手で押し込んでいた。手首まで押し込んだ手を抜

くたびに、美香は喘ぎ声をあげ、愛液を迸らせた。ポール一杯を、中に押し込み、鋼鉄製の棒を突っ込み、蓋をした。

「準備が整ったようだね。どうだい、調理され食われる心境は？」

美香が、惚けたような顔を上げた。視線が定まらなかつた。妄想が現実のものとなりつつあった。

「助けてください。まだ死にたくありません……」

蚊の鳴くような声で呟いた。

「諦めるんだね。お前はもうすぐ調理され、あたい達に食われるんだ」

周りで見ていた女達が、含み笑いをした。

「ねえ。マリア。この女の尻美味そうだね。柔らかくて



さ。肉もぎつしりと詰まっているよ」

「考えただけでも生唾ものだね。口の中でとろけるよ」

女達は口々に言い、ごくりと生唾を飲み込んだ。

「そろそろ、始めようか。パトリシア、女を串刺しにしておくれ」

パトリシアはテーブルの下に置いてあった長さ二メートル以上ある鋼鉄製の串を持ち出した。美香の憑かれたような視線が、鋭い先端部に注がれた。美香の背後に回り、剥き出しにされたアヌスに、鋭い先端部をあてがった。

「お嬢ちゃん。ちよつと痛いけど我慢してね」

残忍な笑みを浮かべながら、先端部をアヌスにのめり込ませていった。直腸にこれまで感じたことのないよう

な激痛が走りぬけた。

「ギャー！うっ……。い・痛い……。許して。こ……。殺さないで……」

白目を剥いて失神した。

「心臓は避けるんだよ」

「わかっているわよ。マリア。任せといて」

あつというまに串の大部分が美香の体内に送り込まれた。肩先から先端部が突き出した。女達は、串刺しにした美香の裸身を、コンロ両脇に立てられた支柱に固定した。美香の顔以外の部分に火が通るように、コンロの位置を調整した。すぐに、肉が焼ける香ばしい匂いが工場内に広がって行った。

美香は覚醒と失神を繰り返していた。目覚めている時

は、「熱い、熱い」と、うわ言のように唱え続けた。女達は、美香の裸身を回しながら、焦げ付かない様にオリブオイルを塗った。マリアは椅子に腰掛けて、シャブナーでシースナイフを研いでいた。乳首の先から肉汁が滴り落ち、ジュウジュウと音を立てていた。蓋代わりに瞳に刺した鉄棒が、熱を帯び内部を焼いていた。

「いい具合に焼けてきたね。ちよつと味見をさせてもらうよ」

マリアは立ち上がり、シースナイフで美香の乳首を切り取り口に入れた。

「うーむ。最高だね。若い女の乳首は」

美香の裸身は、一時間をかけてじっくりと焼き上げられた。顔以外の部分が、きれいなキツネ色に焼きあがっ

ていた。既に事切れていた。

美香の死体は、テーブルに置かれた銀製の皿に、うつ伏せの姿勢で横たえられた。鉄串は抜かれており、アヌスから白い湯気があがっていた。大皿の周りには、様々な野菜が盛り付けられていた。女達は、皆テーブルにいた。目の前には、冷たいビールを満たしたジョッキと、空の皿それにナイフ、フォークが置かれていた。

「じゃあ。乾杯といこうかね」

マリアがジョッキを高々と掲げると、皆がそれに続いた。ジョッキをぶつけ合いながら、口々に「乾杯！」と叫んだ。乾杯が終わると女達は、美香の丸焼きに殺到した。我先にと、ナイフで肉塊を切り取っていった。尻や陰等の重要な部分が、先に無くなって行った。火はちよ

うどいいくらいに通っていた。切り裂かれた尻や太腿の切断面から、きれいなピンク色の肉が見えた。

「柔らかいね。若い女の肉は最高だよ」

マリアが尻肉を頬張りながら言った。

「口の中で溶けるんだよ」

パトリシアが目を輝かせた。

「こんな美味しい肉は久しぶりだよ。こりこりとした歯ご

たえが最高だね」

膾肉に食らいついていた女が呟くように言った。

## 第八章 陵辱の嵐

金曜日、午前〇時過ぎ、大黒は自室のベッドで、うたた寝をしていた。寝る時はいつも素っ裸でいた。美佐子達は店に出ている筈だ。身体はほとんど元の状態に戻っていたが、美佐子達がリハビリのつもりで静養するようにすすめるので甘えることにした。

その日はいつに無く寝苦しい夜だった。美香と彩が失踪してから一週間が過ぎようとしていた。ふたりのことが気がかりで仕方がなかった。

何度か寝返りを打った時、微かにザアザアという何かを擦りあわせるような音が、窓外から聞こえて来た。枕の下に隠してあったベレッタM九三Rを手にした。音がふっとかき消えた。

大黒はカーテンの隙間から覗く、暗黒を見詰めた。その時、ガラスが粉々に吹き飛び、ひとつの黒い影が室内に飛び込んで来た。一瞬のことで避ける暇が無かった。ベッドの上で全身黒づくめの進入者に、取り押さえられ、喉元に冷たい銃口を突き付けられた。

「声を立てるんじゃないよ」

慣れない日本語が発せられた。

「お前かい。大黒というのは？ けっこう可愛い顔してるじゃないか」

大黒は、無言で頷いた。目の前に若く美しい女の顔が、残忍な笑みを浮かべていた。女は白人で、ブルーの瞳を持ち流れるような金髪の持ち主であった。

女は空いている方の手で、大黒の男根を弄っていた。

「やっぱり、只殺すのはもったい無いね……」

女は、銃口を突き付けたまま、空いている方の手で大黒の尻を抱き、男根に食らい付いた。ジュルジュルと音を立てて亀頭を吸い始めた。大黒は女の巧みな舌技におかしな気分になりかけていた。睾丸も口に含み音を立ててしゃぶられた。暫くの間女は憑かれたように激しい愛撫を続けた。大黒は逝きかけていた。アヌスに指を入れられ、直腸内を掻き回された。男根が女の口の中で弾けた。突き抜けるような快感の中、断続的に放出した。女は、一滴も漏らすまいと強く吸引した。

「あんたのが、これまで食べた中で一番美味しかったよ」  
女は淫らな笑みを浮かべ、ふたたび男根を口に含み、アヌスを弄びながら口腔性交を始めた。気の抜けた男根が、



女の巧みな愛撫のために、ふたたび硬度を取り戻した。

女は、男根を口に含んだまま、懐からスイッチナイフを取り出し、男根の根元に当てた。

「な・何しやがるんだ！」

女は、男根を吐き出し、大黒の目をじっと見詰めた。

「好物なのさ。塩・胡椒して、ニンニクと一緒にオリーブオイルで炒めたらたまらない味になるんだよ」

女はごくりと生唾を飲み込み、男根を口で固定して、スイッチナイフを当てた。ちょうどその時、ドアがバタンと開けられた。女は稲妻のように振りかえり、サイレンサ付きのブローニング三八〇を、戸口に向けた。そこには、瞳が血のように赤く輝く美佐子が立っていた。ブスブスと鈍い銃声が響いた。美佐子の姿が煙のように、

ふつと掻き消えた。突然、女が轟音と共に壁に叩き付けられ、そのまま失神した。何時の間にか美佐子がベッドサイドに立って、大黒を見下ろしていた。

「私もこれをオリーブオイルで炒めて、食べてみたいな」

「聞いていたのか？」

美佐子は無言のまま、女の唾液で濡れた男根に食らい付き、憑かれたように口腔性交を始めた。

「皆。聞いてくれ」

大黒は、客がひいた伽藍とした店内で、ソファに腰掛け大黒を見詰めるヴァンパイアの女達に語り掛けた。

「俺達は、とんでもない相手に狙われているらしい」

大黒は皆の顔をひとりずつ見回した。

「そこだ。マンションに入居している女達をひとまず遠くに逃れさせようと思う」

「どうやって彼女達を説得するの？」

近くのソファに座っていた真由美が尋ねた。

「お前達は、彼女達を精神的に支配しているんだろう？やり方はお任せするよ」

「で、何処に？」

今度は美佐子が質問した。

「何処でもいい。遠くにだ。明日、千歳から空いている便に乗せる」

「明日なんて、無理よ！OLだっているのよ。会社に何て説明させればいいのか？」

真由美が立ち上がった。

「親戚に不幸があったとか何とか言わせるんだな。とに角、彼女達の命がかかっているんだ。会社なんて何だつて言うんだ」

「わかったわ。皆、今から、女達に言い聞かせるのよ」  
美佐子が立ち上がり、ヴァンパイアの女達に命令した。

女達は立ちあがり、肩をうな垂れるようにして、店を出て行った。

「皆、辛いよ。彼女達と別れるのが」

「俺も辛いよ」

大黒は美佐子が差し出したブランデー入りのグラスを一気に飲み干した。

翌朝、ヘブンビル前の路上に、一台の大型バスが停車していた。中には、入居者の女達六十人が乗り込んでいた。皆、荷物はバック一つ程度を持っているだけで、一様に不安そうな表情で送りに来ていた大黒や近藤それらの店の女達を見ていた。皆、関係を持っている女によって、一晩かかって、旅に出るように説得されていた。最後には抱かれ、夢のような甘美なSEXを与えられた。その時の余韻がまだ残っていた。バスの前後には、黒皮のライダースーツを着込んだ真由美とアリサが、護衛役として大型バイクに跨っていた。大黒が後続を務める真由美に近付いた。

「真由美ちゃん。気を付けるんだよ」

「大丈夫よ。任せといて。帰ったらご褒美ちょうだいね」

大黒はちらりと美佐子の方を見た。美佐子は可愛がって  
いた女の娘と別れるのが辛いらしく、窓の下に立ち、そ  
の娘の手を握り締めていた。

「あれ、持ったのか？」

「ええ、ここに入れているわ」

真由美は左脇腹の膨らみを、指差した。大黒は、用心の  
ために銃器コレクションの中のお気に入りであるデザー  
トイーグル五十五AEを渡してあった。

「気を付けてな」

「ええ。もういくわ」

バスは六十人の美女達を乗せて走り出した。運転席には  
光二が緊張した面持ちで座っていた。女達を載せたバス  
は、国道三十六号を千歳に向かって進んでいた。大黒の

案で、ひとまず、千歳から海外へ逃れさせようとしていた。大曲（オオマガリ）を過ぎた辺りで、バスを運転していた光二は、パトカーがサイレンを点灯させ近付いて来るのに気付いた。スピードメータの表示が八十キロを上回っていた。二台のパトカーに前後を挟まれた。光二は舌打ちをしてアクセルを緩めた。バスは先頭を走るパトカーに誘導され、パーキングエリアに進入した。真由美とアリサが乗ったバイクは、別の方向に誘導されて行った。

パトカーの一台から、帽子を目深く被った婦人警官が二人降りて来て、そのうちのひとりがバスの扉をノック

した。光二は、扉を開けた。婦人警官が乗り込んで来て、有無を言わず光二のコメカミに警棒を叩き込んだ。車内は女達のあげる悲鳴で、騒然となった。二人の婦人警官は、卒倒した光二の下半身を剥き出しにして、男根を持ち上げ、バタフライナイフで切り取った。血塗れの男根を二つに切り分け、二人はそれを口に含み、十分に咀嚼し呑み込んだ。さらに睾丸も切り取り口に入れ、美味しそうにしゃぶり始めた。

間髪を入れずに、ドスや拳銃を手にした五人の男達が、バスに乗り込んで来た。鬼頭組の残党達であった。皆、目付きが異様に鋭く、冷たい笑みを浮かべていた。前側に乗っていた女達に、躍り掛かった。泣き叫ぶ女達の衣服を、引き裂き全裸に剥いた。重たげな乳房を乱暴な手



つきで揉みしだき、乾いたままの膣に指を差し込んだ。

組員達は犬のように、女達の股間や尻に鼻を押し付け、匂いを嗅いだ。ある女は、椅子の背もたれに腹を載せられ剥き出しにされた尻を舐められていた。また、ある女は長い足を大きく、広げられ膣をががつといった感じで舐められていた。女達は声を限りに泣き叫んでいた。男達はシタイ放題に女達を責め苛んだ。

一方、護衛役の真由美達は、反対斜線側のパーキングエリア内に誘導された。パーキングエリア内には、十台近くの大型トラックが停車していた。パトカーに誘導された真由美達は、それらトラックの合間に停車させられた。その時、トラックの幌が空き、自動小銃やショットガンを持った男達が飛び出して来た。鬼頭組の残党達で

あつた。

「アリサ。畏よ！女達が危ないわ」

二人は停車した状態で、片足を軸として一気にバイクを反転させた。高排気量エンジンの爆音を響かせ、二台は出口に向かってダッシュした。十メートル進んだかどうかというところで、黒い巨大な影が飛び出して来て、両手を広げた。一瞬で真由美とアリサの身体が、宙吊にされた。サムソンの怪力は、ヴァンパイアの力を持ってしても振りほどくことができなかった。

パトカーから警官姿のマリアが、降りて来てサムソンの腕の中でもがき続ける真由美とアリサの背後に回った。必殺の蹴りを食らわない様に慎重に、二人のズボンを降ろし、パンティを引き裂いた。懐から二本の凶太い注射

器を取り出し、女であっても惚れ惚れするような美尻に突き刺した。次第に二人の動きが緩慢になり、やがて動かなくなった。

「さすがは、象用の麻醉薬だね。人間だったら即死だよ」  
薬によって眠らされた二人は、トラックの荷台に運ばれた。中には、戦闘服に身を包んだ女が三人待機していた。サムソンは二人の捕虜を、三人に手渡した。二人の剥き出しにされた尻を穴の開くほど眺め、舌なめずりをして出て行った。荷台の扉が閉まり、トラックは動き出した。三人はテキパキとした手付きで、真由美とアリサの服を剥ぎ、全裸にして等身大のテーブルに、仰向けの姿勢で横たえた。四肢を特殊合金製の鎖で拘束した。

「ヴァンパイアというから、特別だと思っていたけど、

普通と変わらないわね」

ひとりが、真由美の臍を指先で押し広げ、まじまじと見詰めた。

「匂いだって、同じよ」

他の女が、アリサの股間に、鼻先を押し込んでいた。

「締め具合はどうかしら」

真由美の臍を見ていた女が、指先を押し、込み中を掻き回した。

「うっ。凄い。こんなのに入れたら男はおしまいね。いきどおしになるわ」

「後ろの穴も、最高に締めりがいいわ」

三人の女達は、顔を見合わせにんまりと淫らな笑みを浮かべた。着ていた戦闘服を脱ぎ去り全裸となり、真由

美とアリサの裸身に覆い被さっていった。

拉致された女達は、そのバスに乗せられたまま、石狩湾新港の一角に位置する工場跡地に連れて行かれた。金網で周囲を隔てられた敷地内には、軽量鉄骨で建てられた倉庫が、三棟あり、そのうちのひとつに集められた。六十人近くの女達が、伽藍とした倉庫の隅に一塊となつて佇んでいた。

何人かは、鬼頭組の組員達の陵辱を、既に受けており全裸であったが、大半は誘拐された時の服を着ていた。

皆、うつむいて嗚咽をあげていた。これからどうされるのかは、考えるまでも無かった。凶悪無比な悪鬼のよう

な組員達が、薄ら笑いを浮かべ女達をじつと見詰めていた。

「服を着ている者は、今すぐ、素裸になれ！」

副組長の鬼頭龍司が、声をあげた。女達はうつむいた

まま、動こうとはしなかった。

「言うことが、聞けねえのか？おい、工藤、女をひとりぶち殺せ。見せしめだ」

工藤が、女達のうちのひとりりを、引きずり出した。大黒に想いを寄せていた女子大生の美保であった。工藤は懐からコルトガバンメントを取り出し、銃身を美保の盛り上がった乳房に押し当てた。

「待て。誰がチャカを使えと言った。お前ら、工藤を手伝え。女を裸に剥いて犯りまくれ」

工藤の近くにいた組員達が一斉に躍り掛かった。履いていた超ミニのスカートを、慣れた手つきで下ろし、パ  
ンティを引き裂いた。シャツを胸元から引き裂かれ、ブ  
ラジャーが紙のように引き千切られた。零れ落ちそうな  
乳房が剥き出しにされた。美保は、放心した表情で為す  
がままだ。

「けっ……。いい女だぜ。このケツ見るよ。涎が出てき  
た」

「おっぱいも最高だぜ」

「オママ\*コもきれいだ。あまり使い込んでいないようだ  
ぜ」

「裏の締めりも最高だ」

「止めて！」

乾いたアヌスを乱暴に弄られて、美保が目にいっぱいの涙を浮かべ泣き叫んだ。

「うるせえ。この糞アマ！」

工藤が、鳩尾に拳を叩き付けた。

「うっ」という呻き声をあげて、美保が悶絶した。床に仰向けに倒れた美保の裸体に男達が群がった。太腿を大きく開かれ、男の顔が、膣に押し付けられた。仰向けになっても崩れない乳房を驚掴みにされ激しい勢いで揉まれた。身体中に男達の手や舌が這い回っていた。ひとりの男は、美保の乳房を舐めながら、前から挿入した。亀頭に真珠を埋め込んだグロテスクな男根が膣内を、激しい勢いで掻き回していた。別の男が、美保の口をこじ開け、異臭のする男根を挿入してきた。三人目は、美保



をうつ伏せにして、美しい尻を犯した。膣やアヌス、乳房に男達の舌や指先が蠢いていた。

美保は激しい屈辱と恐怖を感じながらも、男達の執拗な愛撫によって、暗い欲情を感じ始めていた。五人目の男が、精液を膣に送らせた時、美保は大きな喘ぎ声をあげ四肢を突っ張らせ絶頂に達した。

「女を四つん這いにさせろ」

日本刀の刀身を右手に下げた工藤が、手下に命令した。工藤は、男達に両手両足を押さえられ床に四つん這いの姿勢となった美保の背後で腰を屈め、尻に顔を近付けた。目の前に陵辱によって腫れ上がった膣とアヌスが丸見えになっていた。白く盛り上がった尻の膨らみに舌を這わ

せた。

「美味そうなケツだ」

そう呟くと立ち上がり、刀身の切っ先を、アヌスに近付けた。

「処刑の時間だ」

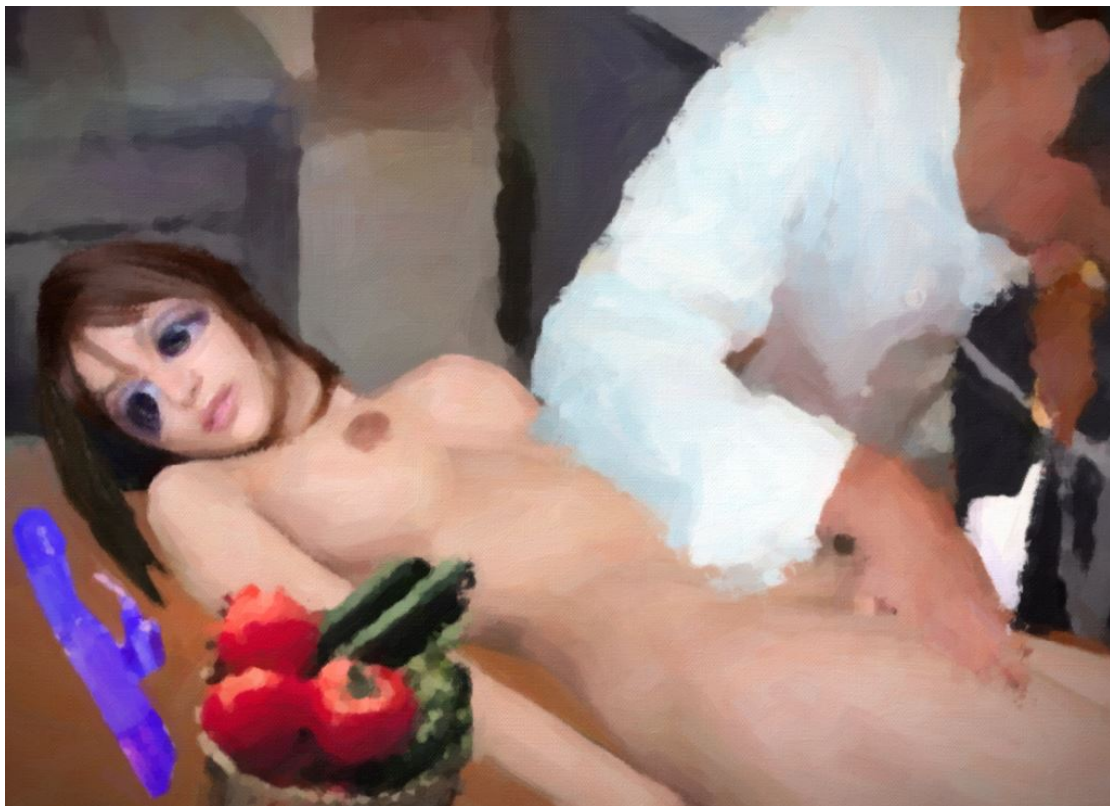
切っ先がアヌスに呑み込まれた。

「ギャー！」

美保が背筋を仰け反らせ、絶叫を放ちながら全身を震わせた。工藤はゆっくりと楽しむように刀身を押し込んでいった。アヌスに焼き鏝をあてられたような激痛が走った。それはまるで、鋼鉄の刃による強姦であった。七十センチはある刀身がすべて差し込まれた。工藤が柄の部分を上左下に動かした。美保は白目をむいて失神した。

「朕！女を解体しろ」

工藤が、組員の中で、調理服を着た朕に命令した。朕は無言で頷き、白目を剥いて全身を震わせている美保を、担ぎ上げ倉庫の隅に置かれたテーブルの上に横たえた。



大振りの中華包丁を、美保の股間に差込、手慣れた手付きで臍を削ぎ落とした。動脈を傷付けたのか鮮血が湧き出し、朕の顔を赤く染めた。陰毛が付いた肉塊を、テーブルの隅に置いた。

次に盛り上がった乳房を持ち上げ根元から切り落とした。うつ伏せに寝かせ尻の膨らみを切り取った。美保は、最初、白目を剥いて低い呻き声をあげていたが、それも止みピクリとも動かなくなった。

さらに中華包丁を大きく振り上げ、片足の根元に打ち込み切断した。骨を打ち砕く重く鈍い音が倉庫内に響いた。両手両足を切断し、ダルマのようになった胴体の腹を割り、血塗れの心臓と肝臓と子宮を取り出した。朕と他の組員二人が、解体した美保の死体をポリバケツに入

れ、持ち出していった。

倉庫内は、重苦しい静寂に包まれていた。恐怖のあまり失神した女も数人いた。

「どうだ？面白かったろう」

女達が皆、はっとした表情で着ている衣服を我先に脱ぎ始めた。失神している女達は、組員によって衣服を引き裂かれた。館内は六十人の美しく扇情的な裸体でむせ返るようになった。

「お前達、これからレズショーを始めるんだ。相手をいかせ自分も気をやること。いいな」

龍司が女達をジロリと睨み付けた。女達は近くにいるもの同士ペアとなって、床に敷かれたマットの上で絡み合った。相手の股間に顔を押し付け、臍を舐める者、うつ

伏せに寝かせた相手の尻の合間に顔を入れ、アヌスを舐める者、さらには、数人でひとりの女を、指や舌で犯す者達などで倉庫内は隠微な雰囲気に包まれた。

涼子は、マンションには入居したばかりであった。同性との性的な関係は一度も無かった。異性には強く惹かれたが同性には興味が無かった。その涼子の近くには、引越してすぐに、何かと親切にしてくれる恵子と明美と亜由美の三人がいた。彼女達が、臆することも無く涼子に抱き付いてきた。一気に床に仰向けに転がされた。三人の表情が変わっていた。確かに言う通りにしなければ酷い目に遭わされるのはわかるが。諦めの表情の中に憑かれたような光があった。

「止めて」

涼子が囁くように言った。

「何言っているの。こうしなきゃ殺されるのよ」

「どうせ殺されるんなら……私達あなたのことが好きだ  
つたのよ」

「明美。足を広げて。亜由美は手を押さえてね」

「止めて。お願い」

両手、両足を、押さえつけられまったく自由が効かな

い涼子は、目にいっぱい涙のため、必死に懇願した。

恵子の指先が、乾いた臍に差し込まれた。

「痛い。助けて……ああ……」

明美が涼子の尻の間に顔を入れ、アヌスを激しい勢いで吸った。亜由美が京子の重たげな乳房を鷲掴みにして、

揉み始めた。



「お前達。女達を壁際に並べろ！ケツを突き出すようにするんだ」

組員がテキパキとした動きで、床で愛し合っている女達を引き離し、壁際に並ばせた。両手を壁につけさせ、尻を後ろに大きく突き出すような格好を取らせた。五十個の美尻が並んだ。壮観な眺めであった。

「好きだけ犯れ！」

龍司の命令で、組員が一斉に動いた。女の背後に膝間付いて尻を押し広げ、アヌスを舐める者、指先を前後の穴に挿入し中を掻き回す者、いきなり真珠を埋め込んだ男根を挿入する者等が、好き放題に女達を弄んだ。男達は、狂ったように、女を換えては、陵辱の限りを尽くした。

若く美しい娘達があげる咽び泣きに混じり、時より鋭い

喘ぎ声が聞こえ始めた。倉庫内には、むせ返るような隠微な匂いが満ちていた。

アジトの前に、果物や野菜、調味料そして様々な酒類を満載した中型トラックが一台停車した。運転席から、鬼頭組の工藤が倉庫のシャッターを開けるために出て来た。シャッターの前には、マリアが両腕を前に組み、その様子を見ていた。

「これは、これは。マリアの姉御に迎えていただくとは恐縮です」

工藤は二十歳も年下のマリアに、媚びるように近付いた。

「首尾はどうだい？」

「ご命令どおりに、買ってきましたよ。ですけど姉御、  
こんなに大量の果物どうするんですか？」

「奴等は、きっと反撃に出る。ここでじつと奴等が来る  
のを待つとき。その間の食料だよ」

マリアは、自分より背が低い工藤の顔を、見下ろすよ  
うに言った。

「食料たって、俺はオレンジが苦手なんですよ」

「お前達に食わせるつもりはないよ。女達の餌さ」

「じゃ俺達は何を食うんです……」

工藤は最後の言葉を飲み込み、じつとマリアの顔を見上  
げた。

「血の巡りの悪いお前にもやっとわかったようだね。果  
物は肉質をさらに上質にするんだ。美味しいよ」

マリアはごくりと生唾を飲み込んだ。

第九章 反撃

第十章 生贄

第十一章 晚餐

後編に続く